

7
24

梅の家主人編纂

頓智奇談

東雲堂本舗

091816-000-3

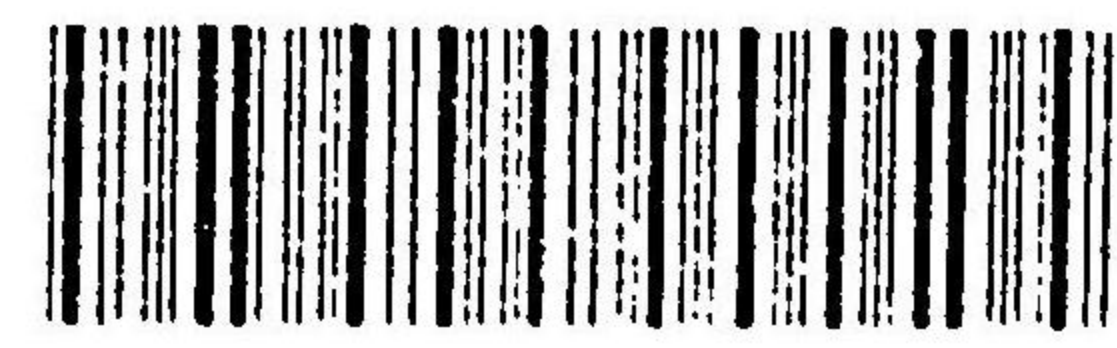
特63-920

頓智奇談

梅の家主人/編

M24

DBO-0333

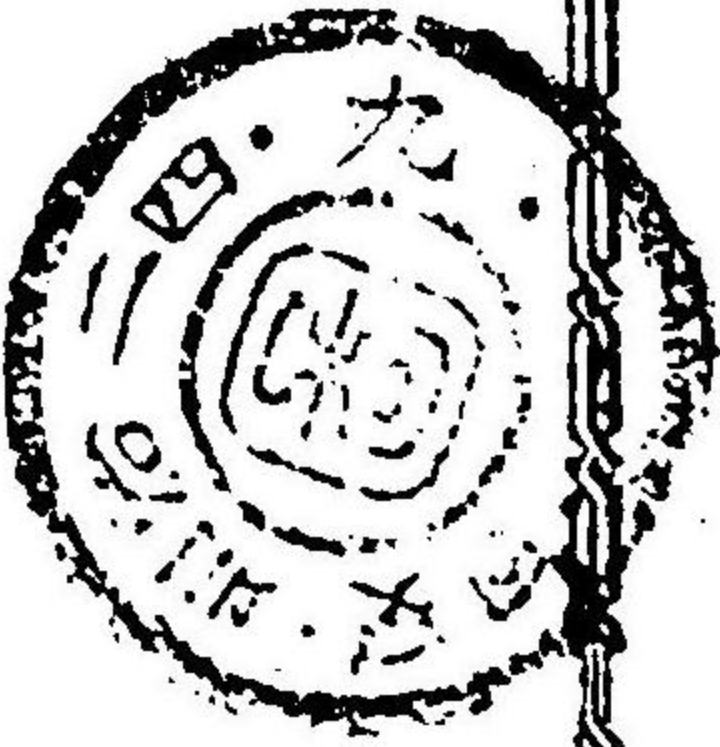




頓智奇談

頓智をあざみ又たいふる辭

春のやみぢる



頓智はと益なき物は無き大は常座通れ小は下士の智。
 卑しき場當り小刀細工さるを利する所多くて面白し。
 とやをも誰の狂語ぞ文章に用ふるも一向にをかしや。
 可しきとに一場の笑幕なき事煙火の如し然るに可訝。

(香冠)

頓智身しどや可訝頓智の用顯眞なるに隣を繪る此樂
忍ばれうや

頓智奇談

梅の家主人編

◎高く出た

神道者佛氏に向ふて曰く地獄極樂何くに在るや佛氏曰く高天ヶ原の隣りに在り神道者屈す

◎獅子の代り

某侯有名なる畫工某を召して種々畫かしめたる後其智量を探らんと欲し正午の牡丹を畫かしむ某直に牡丹の花を畫き其下に目を細くしたる猫を畫さしむ

◎武は戈を止む

宋の武帝軍を出さんとす侍臣等諫めて曰く今日は往亡日なり往亡とは行きて亡ぶると謂ふ心なり進み玉ふと勿れと武帝曰く汝等何ぞ斯の如く愚なるや我往き彼亡ぶなりと終に軍を發して敵を亡ぼす

◎兄はからんや

昔し兄弟二人にて父の仇を索ひる者あり其仇は權貴の人にして用心懈らず年久しきに尙は本意を達し得ず弟は何とぞ仇の心を弛めんと謀り酒色に心を傾けて遊廓へのみ通ひ詰め今日しも流連の宴席に兄は弟の心を察せず「これ弟よ汝は仇を索ひる今時に酒や女に精神を奪はれて孝道が立つものか實は酒と女は汝が身に取りて敵なりと戒める兄の語に續きて弟は杯を擧げ兄に向

ひ「兄さん敵に逢ひ乍ら見遁がす譯にも行まいと飲み乾したと

◎楚材は恕才なし

夏人常斧善く弓を造るを以て元の太祖にしらる毎に自ら矜りて曰く國家方に武を用ふ耶律楚材は儒者なり何ぞ用ゐん楚材の曰く弓を治るもの尙弓匠を用ふ可し天下を治むるもの豈天下を治むるの匠を用ゐざるべけん耶と帝大に感賞せり

◎盲く繋げた珠數屋町

昔し常盤津の太夫某或る所にて梅川忠兵衛道行の段を語りし時京の六條の珠數屋町と云ふべきを誤つて京の三條のと云ひかけしがすかさず又三條合せて六條の珠數屋町と語りしかば間の抜のぬのみか却て喝采を博したりと

◎一名草履神社

和泉式部或年下加茂の御社に詣りたる折に女子の身のとなりければ草履にて足を痛れ止むを得ずして紙を捲きつけ置けるに何時しか神主たる忠頼の目にとまり「千早振るかみをも足にまくものか」と難じければ式部取敢ず「是をぞしものやしるとはいふ

◎一身三舟に乗る

白川院西川に行幸の時詩歌管絃の三の舟を浮べしその道々の人々を分けて乗せられけるに經信卿遲參の間ことの外に御けしきあしかりけるはせにとばかり待たれて参りたりけるが汀に跪きてヤ、どの舟にまれよせ候へといはれたりける時にとりていみじかりけり斯くいはん計に遲參せられけるにこそさて管絃の舟

にのりて詩歌を獻せられたりけり

◎其夜死ぬとは云はざりしや

或婦人嫁入の時途中にて葬式に出會せしが縁喜の悪き事よと知己の菓子屋に逃込たり折柄蜀山人の居合せしに幸ひ先生縁喜直しに一句願ひたしと云へば

世の中は戀と無常の別れなり

死に行く人とさせに行く人

此句にて一同色めき勇み行きしとなん

◎自身之を爲して侍臣に爲さしむ

昔し熊本藩に尾藤金左衛門なる者あり三千石を領し質素自ら守る嘗て一屋を建てんと欲し侍臣をして築作に従事せしめ自ら之

を監督す侍臣皆之を厭ふ一朝嚴霜雪を欺く金左衛門襟袖に立ち侍臣に命じて壁土を踏ましむ侍臣降霜の爲めに壁土凍結し居れば皆々快き返答なきゆへ金左衛門俄に命じて曰く余他行せんとす乗馬の用意し汝等扈從せよと自ら馬に跨り悠々として壁土を踏みて幾度もなく往來せしかを扈從の侍臣皆履物を脱して壁土を踏みしと云へり又一日侍臣に屋根葺を命ず侍臣曰く臣等未だ屋根葺の法を知らずと金左衛門そは最も的事なり然らば我自ら爲さんと屋根に登り棟より下に葺き下らんとするゆへ侍臣聲かけ屋根は軒より上に葺上るが至當にて候と云ふを聞くより金左衛門打ち笑みて汝等幸ひに屋根葺の法を知れり余又勞せずと遂に侍臣になさしめたりといふ

◎ 蛤堀に入て白銀となる

昔正保二年酉十月廿九日御堀廻御成御擧にて眞鴨二羽小鴨一羽取らせられ脇鷹にて鴨五羽を取り夫より神田橋外へ成せらるゝに鎌倉河岸の御堀に鴨群居たり礫を打て逐ひ立てよとの上意の處礫に打つべき石なく御徒衆大に困る久世大和守之を見て路傍の店にある蛤を取て打つべしと下知す則ち取て鴨を逐立る又御擧にて鴨を得玉ひ御機嫌よかりき而て翌日御老中松平伊豆守阿部豊後守同對馬守等久世大和守の作意を稱擧す時に豊後守蛤商人に價を取らせ然る可くと云伊豆守聊か價に及ばず御用に立ちたるは冥加と云ふべしとなり豊後守云ふ御用に立ち寔に冥加と云ふべし然らば御褒美を賜るべしとすれば天下の者いかでか

悦ばざらん商人は利徳に依て妻子を養育す然るに損失しては御用に立てし詮なしと茲に於て御用立し輩に白銀を賜はりしとなん

◎姓づけに甘い

藝妓の頓智 此程の事なりとか某地方長官が管内巡廻の序或る温泉場に立寄られし時其他の郡長とのは何がな長官の御意に適ふ待遇をせんとさまぐ心盡したる末一夕盛んなる酒宴を設けて長官を迎へ此頃東京より温泉場に出稼する四五名の藝妓をして酒を脩め興を助けしめしに長官は太郎となし呼べる藝妓の色香を深くも愛られ是非枕席に侍らしめよとの内命ありしより郡長は太郎を招き具さに長官の内命を傳へ是と云ふ

も拙者が媒妁手前は誠に仕合者ごと鼻動めかして説誇り嘸や太郎も喜ばんと思ひの外につんど濟まし思召は有り難うございませが生憎鑑札を一枚しか持ちませぬのでと強藥の臂鐵砲に郡長は二の句も續けず直様有の儘を復命せしに長官は大いに怒り苟くも予が管轄縣内に住みながら予が命令に従はぬ者のあるべきや高が賤業の女一人夫すら説付けする事が出来ぬやうでは平生の郡政も思遣られると異なる所に付込されしより郡長とのは目を廻す許り打驚ろき再び席を退下りて此回は戸長を呼出しさて藝妓太郎事忝くも長官の御目に留り而も拙者が媒介を致遣はさんとするに否ぢや何ぞと不屈の申條は畢竟其許等平生の示しが届かぬからぢや苟くも拙者が管轄郡内に拙者が命令に従はぬ

者のあるべきや其許甘く説付れば好し左もなき時は拙者に於ても屹度了簡致さにやならぬと事々しき命令に戸長どのも膽を潰し早速太郎の家を訪問れて仔細を語り強て首を振る時は汝の爲にならぬのみか郡長始め此方迄がお扶持離れに逢ねばならぬと諭すが如く訴ふるが如く談じ掛けしを太郎はいと蒼蠅き事に思ひ如何にもして逃れんと暫し思案に暮れ居たりしが忽ち一策を巡らして崇爾と笑ひ夫程迄に仰しやるなら如何にもお心に從ひませう其代り長官様が御扶持離れにおなんなさるかも知れませんが夫は御承知でありませうねと以の外の一言に戸長どのの驚いて如何なる譯と尋ねしに實は長官よりずんと目上のお役人が先頃湯治にお出の折お情をかけられました若しも此後其方に指

でもさす者があつたなら直に知らせよと堅い仰折角探を立ていと存じては居りましたが貴官を始め郡長さま迄御迷惑とあるからは悉しう容子を認めて其お方にお詫を致した上長官さまに從ひますから暫時お待ち下さいと云ひつゝ、硯取出し文認めんとする體に戸長どのの狼狽推止め一先郡長を経て長官に伺ひその指令に因て又何分の沙汰をするかと云捨て馳戻り聞きし仔細を郡長に報じ郡長より長官へ聞ね上げしに流石の長官も目上の一言に忽ち我を折られけん早速太郎を迎へ来りさまぐぐに機嫌を取りてどうぞ内分に致し吳よと詫言をして出立されしが太郎の頓智味いかなと磯部の印ある郵書到来

◎曇らす湧る

静岡にて伏見屋幸藏と云へば誰知らぬ者なき洒落者にして諸藝に於て何一つ知らぬ事なき才子或る頃長唄の師匠杵屋正次郎の當地へ來られし時某の席に於て催しありしが師の杵屋は伏見屋に向ひたて三味線を弾けよと云ひしに伏見屋は直に話し杵屋は二枚目にて唄は外記猿「しばし曇りて又冴る」と云へる所に至りしが逆も師匠と俱にては此處三味線の後、は知れた事師匠は元より之を困らし呉れんとの心なれば伏見屋は此處にて俄に三味線を休めちりつてつんを口三味線にてしてやつたり師の杵屋始め一同は意外の事に抱腹絶倒せしが伏見屋は跡にて「及ばぬ事して冷汗を出し聽人をして不興ならしめんよりはと右の次第に及びしなりと云ひしが機に臨んでの頼才道は洒落者なり

と師も之を賞しあへりとはおほんでげすな

◎はめたくぞある

昔ある大名の若君七歳になりけるが其乳母の小督といへるは石野八兵衛義利といふ人の妻にて頗る醜女なりしかと有繫は武士の妻又大名を育つる乳母丈ありて不斷何事も幼君の御爲めになれかまど心得居りし或る雪の降りたる朝つれぐのお伽に庭の方をながめつ、幼君に向はれ昔し菅公は若様と同じ年の頃お庭の紅梅をながめながら

うつくしや、紅にも似たる、梅の花、

あこが顔にも、つけたくぞある。

斯くお歌を遊ばされたりと話したりしに其若君は去りげなく

降る雪が、おしろいならば、手にためて、

小督が顔にも、ぬりたくどある、

とせられて早速の鸚鵡かへしに流石の小督も舌をまきつ、一入
未頼母しく思ひけるどぞ

◎清州に親捨山の名は残らず

元悟人と爲り頑黠不孝其父老て多病なり元悟之を厭苦し其子元
覺に謀り之れを山野に棄てんとす元覺大に駭死言を盡して之を
諫止すれども聞かず乃ち止むなく其祖父を輿に載せ相共に之を
昇して深山に入り壑中に棄つ元覺まさに輿を持して歸らんとす
元悟曰く是れ破輿なり何の用る所あらん宜く之れと共に棄つべ
し元覺曰く今己に祖父を棄つ大人また老ひて祖父の如く成り之

を、見、が、す、つ、る、の、時、輿、な、か、る、べ、か、ら、ず、と、元、悟、之、を、聞、き、大、に、悟、る、所
ありて復其父を昇して歸り遂に孝道を盡せりといふ

◎院長が會員ぶけに

瘋癲病院の醫者が湯に入つて居る患者の番をてし居るとき一人
が不意に「オイ皆否か一途にあの醫者を蹴らうぢやないか」と言
出すと皆々一致して「ウン蹴らう」と叫出したから醫者は仰
天しましたか左あらぬ體で「ヨシ、」マが其前にみんな一聲鯨
波をあげたらどうだといふと又々一致して患者一同大聲に鯨波
を作ると忽ち監守のものが澤山馳付けて來て醫者は危難を逃れ
ました

◎利休へ行なら鞋穿て行よ

豊大閣晩年茶道を好み利休を師とし屢ば諸將を延ひて茶式を演
 せらる然るに加藤清正は痛く之を排斥して思へらくこれ逸人隠
 士の僅に其日を消する具のみ元より文學に益あるにあらず然も
 武事に害あり國家を治むる者の修すべき道にあらずと依りて諫
 を奉ると再三に及べども太閤用ひざりければ此上は利休を殺
 して禍本を斷つの外なしと決心し伴りて利休の門に入りて茶技
 を學ばん事を乞ひければ利休大に喜びて應て其茶室に請し入る
 くに清正脇差を携へて室に入らんとす利休止めて茶道の式室外
 に於て之を解くものなるよしを諭すに清正儼然として云ひける
 は茶の式は左もこそあらめ左れども刀劔は武士の魂なり清正に
 於ては茶室と他所とを論せず武士の魂は瞬間も放ち難しとあり

ければ利休打笑ひてさらばさ候べしとて許しぬ借清正は透を伺
 ひ刺殺さんと利休が式を行ふ手前を目も放たず守り居るに利休
 従容として式を行ふほど釜をあくれば釜蓋となり火箸あぐれば
 火箸盾となりて打込むべき透問たゑて無ければこはそも如何に
 と自りら心に異しむ折から利休はやをら釜を取りて之を掛くる
 と見るほどに忽ち爐中に覆へしければ灰はをつと室中に立ち満
 ち目口鼻孔に入るに清正覺へず障子を開け放ち前庭に飛び下り
 たり其時利休は清正の殘し、脇差を取り舒かに清正を呼びて加
 藤殿武士の魂は如何にせられしぞ斯くても尙利休を殺さんとせ
 らるゝやと云ひけり是に於て清正大に愧ぢ且つ茶道の自から心
 膽を練るものなるを知り終に心を傾けて利休に師事し茶道を修

行せりとぞ

◎藤意即妙

此頃或る雜誌に「下より上へトンと落けり」と云ふ難題へ上の句を付けたる頼智少年の語ありしが今是れと類似のとあり昔或席にて「下から上へ下るなりけり」との難題を出せし者ありしに或人即ち「藤の花水に映りて咲く時は」

◎山邊の雪

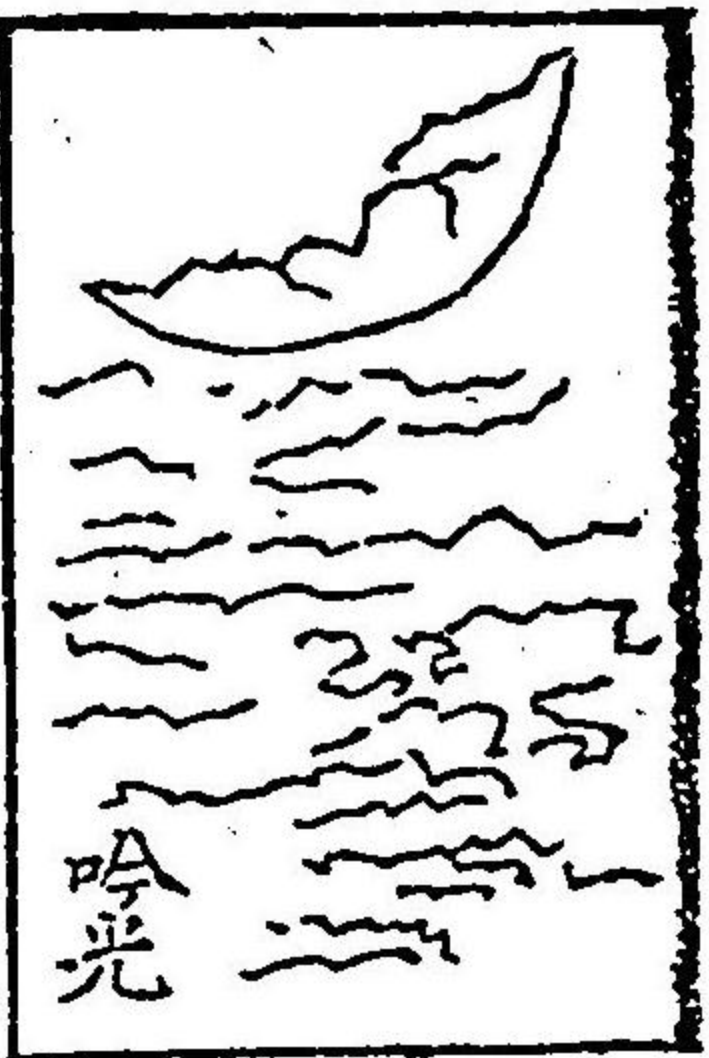
服南郭曾遊二祇園臙脂叢一歌妓某出二紉扇一詩二其品題一南郭乃把筆書二大江千里月、小野小町花十字一與之、蓋大江千里、小野小町俱百人一首中人名也、而花月二字亦取二其和歌首字一云（月見れば千々に……花の色は……）

◎手附の取替旨く倉橋

福岡の大主黒田右衛門佐忠之菩提所へ參詣の途路鬼河原源藏と云ふ暴行者路の真中へ兩脇突き出して居る故大主是を見て彼の向騰は賣物なるや染奴に問へど近習某鬼河原に之れを問ふ源藏曰く二百兩にて賣るべしと侍臣倉橋重太夫進み寄り金五十兩を手附に渡し残金は追て遣すべしと源藏諾して金を收む倉橋又曰く此方へも手附を取らんと扱打に片足を落す之に由て大主倉橋に千石を加増す

◎蛾眉半輪の月を出す

後醍醐帝の吉野行宮に在るや中納言隆資洞院實世藤原宗房侍す賜酒の際辨内侍誤つて御盃の土器を破る衆皆愕然たり内侍即吟



して曰く「さかづたの、われてどいつる、雲の上」宗房聲に應じて曰、星の位の、光りそへばや」帝大に感賞し給ふ

◎落語家が纏頭の中裁

俳優中村時藏が先年羽前山形より歸京して休業の徒然田甫の松本芳延落語家燕枝を誘ひ連れ淺草近邊を運動がてら辨天山の料理屋岡田の主人に知己あれば彼處に立寄り晝飯を喫せんと新座敷に一杯を汲ひ。席上華美活潑の播磨屋なれば岡田の家内へ纏頭を附したるを主個は却て迷惑がり他家にては兎も角も我家にては所謂親類交際なり且は我方にては折節客より家婢共へ纏

頭を給ふとも受けぬを規則と仕來れば失敬ながら返却せんと野暮堅く言張るに時藏も一旦出したる纏頭故返されては迷惑と主客の問答を傍の燕枝が聞兼ね向後は知らず今日は先づ受けたまへ其の中口にと黒斗の筆探り懷紙に即詠の戲笑歌

心配も其の時藏の時として

氣を播磨屋は止に親類

有繁落語家の親玉株いよ談州樓と一座の喝采

◎課外の試験

某小學校の教官立方體の一小木片を生徒に渡し此木片の根附の方を判知する者あるやどのとに衆多の生徒之を取りて交々熟視するも更に何れが根附の方なるを判する能はず時に一生乞ひて

之を静に盤水に投じたるに木片の一方偏沈するを指し此方根本
なりと進答しけるに能く的中せるを以て特に過多の賞典を與へ
たりといふ

◎世辭で丸て葉書で捏て

頓智頓才のある者は浮雲場合も旨く退れるもので府下南葛飾郡
木下川村に住む森野彦四郎(四十)は壯年時から面白い氣質で決し
て腹を立た事もなく氣轉の利た性なるに似物夫婦の壁に漏れず
妻のお竹(四十)も頓智ものでそれに誰にもお世辭が宜ので村中で
も愛敬者と評判を取居たが或る日の晩夜業も仕舞ひ夫婦かけ
向ひの氣樂さに其儘枕を並て寝ると間もなく表の戸を叩き起る
くと言ふ者がある故お竹は寢巻の儘で起出誰殿ですかと表の

戸を開て来た人を能く見れば黒い布で面を包み一人は長い刀を
持ち一人は棒切を持って居るのでぎよつとはしたたが氣を落付夫を
起して斯々と話すを聞て彦四郎は少も驚かず微笑乍ら其處へ出
て挨拶をし是はく誰殿さまですか夜分故お見忘申しましたか
マア此處へお這入なさいませ表は寒くつて池ません何お金が御
入用昨晚ですと少々は纏つた金も有ましたが生憎今朝外方へ遣
りまして只今は三圓五十錢しか有ませんが宜敷はお持下さいま
し衣類とても最着古しのお目に懸るもお耻しい品ですが是も宜
敷はお持下さい外には何も差上る様な品も五在ませんマア堅お
座りなすつて一吹召上れお竹お茶でも入ないかど一人で饒
舌乍らお竹に言附け金を持出で強盗も氣を吞まれ紙に包んど其

金を取り一散に逃げ去た跡へ棄てあつたのは竹に銀紙を張付た
刀の様なもので有た故夫婦は顔を見合せ此様な物なら三圓五十
錢遣なけきは宜かつたと言彦次郎が悔しがる傍から竹はなに
今盗賊に遣つたのは只た五十錢で後の三圓と見せたは郵便はが
きの反古で有たと言たので果は笑て寝て仕舞たとは是も頓智頓
妻の一計でした

◎意は醫なり

婦人は心の狭き者にて喜怒哀樂ともに感じ強死故少の事も思ひ
惱むものなるが長谷川町の太物渡世何某の妻お米(二十)は先頃よ
り血の道にて枕に着てをる故に神田錦町へ縁附てゐる同人の姉
お幾が四五日前に見舞に來り此前來た時はお醫者様も大分い

と被仰たが今見ると其時よりずつと血色が悪く成てゐるが何處
ぞ別に悪いのかへと問れてお米は目をうるませ外に悪い所も御
座りませんが到底今度の病氣は治りませんは私死ぬと究ました
と言れて姉は大に驚きそりや又とらした事が有て「ハイ外の事
でも有ませんが二三日前に本所の伯父さんの所から尋てくれま
した使の者が間違るとは言ながら見舞に來たを悔に來たといひ
品も又梨子を持って來たので私の生命もなしになり悔みを言れる
様に成ふかと思つて夫が悲う御座り升と惜々として語りしに姉
は聞より打笑ひとん事かと思つたら解もない其話し悔みを聞
から氣にする様な者夫れ苦止と字に書ば病の苦が止で全快をす
るといふ吉兆又梨は有の實といへば和女の生命は何までも有の

實で長生をするといふ前表故なき思はずに喜んでお居よと
氣轉を利して言たるにお米か胸膈は忽地問け夫より追々心地よ
く昨今はめつたり見直せしといふ

◎上人も亦頼智宗か

遠藤盛遠僧と爲て文覺と號す曾て罪あり伊豆に謫せらるるに當り
船にて澳川を下り渡邊に宿す舟人等私語す夜半僧を劫して金
を得んと文覺竊に之を聞知らざる爲して念珠を捻り禱て曰く
神護寺造營の用金一百兩五條天神の華表の下に埋めたれば我再
び上洛する迄諸佛守護怠る勿れと舟人聞て大に喜び即夜京に入
り華表の下を掘ると四五尺遂に金を得ずして還るといふ

◎こまつた故に頼智

昔力士谷風が當時日の下開山と爲るとき大坂力士の八角或る豪
商の依頼に由り如何ぞして谷風を負さばやと種々工風の末ふと
思付さしとあり扱て谷風と取組の時充分仕切を張り谷風の氣合
已に充満するを見てまつたと云て其氣を抜き後取組て之に勝た
り是れ角力社會まつたの嚆矢なりと云ふ

◎滑かに解けたも道理薯汁なり

曾て後藤象次郎氏が土州の人々を高輪の自邸に招きて宴會を開
きしと死去る頃米國に於て病死せし故馬場辰猪氏が演説をなし
て今日の宴會は誠に喜ばしき事のみなれども唯一つ殺風景な
るものあり云々として某氏に向け攻撃を加へたるに某も之を聞い
て腹に据ひ兼ねたりけん突然氏に打て蒐り雙方負けじと組打し

て中々引分けべきもあらざりしに傍に居合はせたる何某は即座
 の氣轉にて有合と誓汗を引寄せて二人の中へ被せければさしも
 の組打も遂に滑かに解けたりとぞ



◎不思議の講釋

アイルランドの或耶蘇僧官が一日神の不思議なる事に就き説教し歸る道にて傍聴者の一人いふ貴官よ彼の不思議なる事とは如何なる譯か最少し委しく説き明し下されよ僧官曰汝は不思議なる事の意味を聞きたいか然らば前に歩け我汝に説き明すべしと時に其人は先立ちて歩さしが僧官は其後になるや否や甚く彼を蹴たり其人驚て曰何事をするか僧官問ふ汝はそれを痛いか何とか感じたか其人答て固よりの事ぞ僧官曰く然るべし若し之を感じなかつたらば即ち不思議なる事といふ

◎遠方御苦勞

魯帝が英國に行幸せし時一日水晶宮に出遊を試みんとせしも歐

洲大陸より脱走し來れる大勢のものが暴行をなさんとを慮りて躊躇せしに此時紳士に扮装して隨從せし魯國の國事探偵吏ザルポツフは此憂なきとを保證し置き脱走人の會合所なるウヰンクトリヤ停車場に至り英國の警察と打合をなし各國の言語に通ずる探偵を派出せしめ脱走人と思ふものゝ來りて切符を買ふを待ち佛語又は獨逸語魯西亞語等にて「水晶宮に至る乗客は何卒ぞ此方へ」と聲を掛け特別列車の烟を吐て待ち居る所へ案内せり此列車の中には脱走人のみならず衣服の異様なるもの及び倫敦の拘摸兒もありしと斯くて満員になまければ「ヤタム」に向て急行せり左れば此列車は水晶宮に至るの停車場より數里外なる「ヤタム」に著し警察に欺かれたるとは夢露知らぬ乗客は種々苦情

を唱へたれども鐵道役員は雜沓に紛れて此疎忽を致せりとて只
管詫び入り無賃にて又倫敦まで送り返したり列車の己に倫敦に
達したる頃は水晶宮の宴會は最早散して魯帝は無事に還幸せら
れたり後帝此計略を聞き厚く扮裝紳士のザルボツフを賞せしと
なん

◎併せて八賢人ごんまる

織田信長或時諸大名と物語し居たるとき信長小姓蘭丸を呼てわ
れにある屏風の繪の七賢人が先程より何やらつぶやく様なり聞
て參れどのよしに蘭丸畏て屏風の側にしばらく耳を付け立
歸て云ふやうにはあれへ參り候へば君の御樽を申候が拙者が參
り候へば彼の者共だまり候と此時信長も一言なく大小名迄も其

智を感せしとぞ

◎雙方に平等院

明和三年山城國宇治川洪水の際久世郡乙方の惠心院與正院は北
川岸にあり宇治の平等院は川を隔て、南岸にあり惠心與正の兩
院にては石垣をして堤へ上置をせし故是が爲に水は平等院の方
へ流れ込にぞ此方にてても同じく堤に上置をしたる處兩院の方
は理不盡にも入足を引つれ來りて平等院の上置を取除たるを以
て終に平等院より京都町奉行へ訴へける市尹石河土佐守雙方を
呼び出して尋問の處寛文十一年に平等院より置増三尺と限りた
る一札を兩院に取置しを持出でたれば如何ともする能はず然れ
ども平等院は宇治關白賴通草創の地にて關白道長の寺なれば役

目の表を立つれば名刺の不利となるを以て有弊の市尹も當惑せしが忽ち案出するにあり曰く證文通りなれば平等院は向後上置三尺に限るべしと申渡しければ兩院の方は我存分の通り勝たればとて勇み悦びたり之に引更へ平等院は力を落せしに土佐守は更に平等院方に向ひ其切岸堤等の尺は水面より積るが天下の法なれば今常水面より一尺計りならば尙二尺築増て證文通り三尺にすべし何時迄も斯の如く川岸高く水面より三尺ならば築増々々する時は證文通りにをむくとなく水も這入るまじとの理解に扱はと計り其頓智に感泣せしと

○隗より始めよ

昔し某藩士に自ら學者先生を以て任ずる人あり動もすれば則ち

威儀を正しくし儼然として曰く開闢以來周の世はと萬民安く天下治るはなしなんでもかんでも周の時代の様にさなくてはならんと云へば或人左様ですかさらば隗より始めよと申すともわれは先づ殿の祿を周代の弊より量り主君より御頂戴あらば先生は即ち周代の君子人ならん是は如何にといふ蓋し周代の一斗は大槪我國の一升に當るを以てなりこれにはさすがの先生も一言の答なかりしと云ふ

隗より始めの故事 燕の昭王賢を招かんと欲し之を其臣郭隗にはかる隗曰く古人死馬の骨を五百金にて買ひ來る君怒る涓人の曰く死馬すら五百金に買ふ况んや生ける馬をや馬今に至ると已にして千里の馬至ると云へる話あり今王賢臣を招か

んと欲せば請ふ魄より始めよと王厚く魄を遇と天下の士争て燕に趨けり

◎亭主の才勳

英國に有名なるコロチル、シヨーンストマシヨル、スミツスノ兩入常に一所に掛け宴樂遊戯を爲すに其愉快の爲に時の移るをも打忘れ甚く深更に及びて歸る事も多かりける斯る時には其細君は良人に忿怒し顔色を見せんが爲め態々起て居る故之が爲め戸外の愉快も今更恨めしき思ひをなせり或夜シヨーンス長く遊戯をなし深更に至て其家に歸りしに細君は頗る忿怒の面色にて待居たりければ流石百萬の強敵をも恐れぬシヨーンスも細君の無理ならざる怒に逢ふて大に逡巡の有様なり是に於てシヨーン

ス一計を生じ直に寐床に入らず細君の傍に座を占め臂を膝の上置き手を以て顔を掩ひさも悲しさに時々嘆息し又スミツスは可憐さうぐ嗚呼因果者など苦しげに言ひければ先刻より無理我慢をして無言なりし細君も今は不思議に堪へ兼ね「彼のスミツスが如何しました」と問ふシヨーンス得たりと靜に嗚呼彼の細君が今歸りの晩いとしてシヨーンスを苦責て居るであらうと思へば如何にも可憐さうぐと云へば細君其戯言に怒を消し夫婦喧嘩も無く無事に濟みけり

◎御内々

初代中村仲藏が未だ若輩たりし頃申上ますの役を勤め或日どんくくと花道際迄驅け來り「申上ます」と呼ばりたりしが舞臺

に家老役にてり、しく控へ居りしは四代目團十郎にて「迷た、
 しい何事じや」と聲懸けたるに仲藏は之に答ふべき臺詞を忘れ
 如何はせんと困し果てしが不圖思ひ付きて「御内々でござりま
 す」と云ひければ團十郎も透かさず「苦しうない近う」と云ひ
 たり仲藏はつかつかと走り行き團十郎の耳に口寄せて「親方忘
 れましたよ」と云ひければ團十郎も可笑さを忍びながら其用を
 聞きし振りにて「是へと申せ」と云ひ捨て先づ其日の興行を無事
 に終りし後團十郎は仲藏を呼びに遣りければ仲藏は今日の失策
 に付て嚴責を受けるならんと恐るゝ出で行さしに團十郎大に喜
 びて今日の大手柄は實に感心したり若し文句を忘れた儘にぐづ
 くして居らば貴様は勿論吾までも見物に對し大耻をかき答な

りしに貴様が御内々云つた當意即妙の文句の爲に無事に其場
 を繕ふとを得たり是も畢竟貴様が藝道に熱心なるに依るとて珊
 瑚の緒を與へりどぞ

◎話は替り居申候

昔或藩に武士にして己れの刀を他のものと取違ひたるどきは切
 腹せしむるの藩制を設けしが或時家中の諸士皆登城し一同退散
 の後一人残り拙者の刀無之と目付役へ届出る者あり能く檢する
 に誰ぞ取違ひたるか他の一刀あり依て目付直に其刀を箱に入れ
 先に退散せし諸士へ廻状を添へて曰く今日殿中に於て刀の替り
 し者あり依て此刀殘居候問若し替りし者は其旨申出づべし云
 々と認めて廻せしに何れも姓名の下へ刀替り不申候と認めあり

て刀は何時の間にか替り居りし故人を罪するとなくして刀は其主へ還りしとぞ

◎ 匿りて通れ兩國の橋

波斯王スカアリヤ身の不幸を嘆じ國を棄て漂泊せんとす其弟スカーセナン諫て曰く君彼の眼科醫を見ずや彼れの不幸なる生涯悪き眼許りを視ると王笑つて止む

◎ 利刀も鋭智に逢へば

舊幕時分或藩の武士一の寶兜を藏する者あり曾て衆士と君侯に侍す自ら誇りて曰く吾兜の堅剛なる如何なる名劍利刀と雖も之を研る能はずと劍客某亦其技を負ひ曰く其術を以てすれば何條研れざるものあるべきとと爭論の末遂に之を實地に試むること

なりしが劍客はいかめしく襷を掛け充分に氣合を入れやつと一聲あいや將に之を兩斷せんとするを兜の主突然聲懸け暫くお待あれ拙者重方代の寶物今貴殿の刃に掛り若し兩斷せらるれば最早寶にして寶にあらす永年の愛着暫く別を惜み度しと之を取り懷中より絹を取出し徐ろに之を摩しいざとて之を渡したれば劍客は冷笑しつゝ再び大刀を揮ひて之を研りしに一たび氣合を抜かれし故遂に仕損したりと

◎ 鬼も笑ひしならん

昔し大御所家成公相撲上覽のとわり未曾有の盛典なりしが其頃名譽の力士雷電は一番勝負に打負けたるが少しも驚く色なく莞爾と笑ひながら砂上へ「今年や負けても雷電勝つ」と書きて土俵

を下りしかば天晴力士の振舞よと評判益々高くなるとしと云ふ

◎苦も變句

或婚姻の祝席で唄ひ始めた小唄の文句に「やがてわかる、横雲の」といふ所まで謡て來やがてと早やらかしたがる、は障り文句と心附き調子は延ひたれども「頓ては髪によこ櫛の齒はと齡を」と下に付くべきわをばにして髪のと働かせしに一座其機轉に感じたりと

◎智識も運動

英國に温泉あり爰に住する醫一たび食の消化し難さを治してその名大ひに顯る偶々其名を聞き來り治を乞ふ者あり曰く健康の適和を失すと醫此を見るに年未だ盛なるに容貌甚だ衰へければ

醫思へらく是必ず富家にして躬自ら我が身を養ふとを知らず唯に放逸にのみ耽り外に出ては車力を藉り内に入ては錦繡に纏はる遂に運動の法を失ひしならんと乃ち一計を設け近郷に同伴せんとて與に出でけるが既に都を去ると五里餘に及ぶとき其携ふ所の鞭を落しければ此を拾はんとて車より下りけるに醫之を視て車頭を歸路に旋轉し馳せながら告て曰く汝獨り歩んで歸れと富客大に憤り此を追ふも及ばず止むとを得ず歩んで漸く都に歸りけり此れがため大ひに食を消化して治療を助くるの益となりしとぞ

◎賊迄ぞろん

頼智盜難を免る 此頃下澁谷氷川神社神官江川氏方へ一人の賊

入りてお定りを言掛ると金は大切な者故神前に藏しありとて直に往つて太鼓を鳴したれば賊は驚きてとろんど消へたり

◎研智の好料

明治の初め當地の平ッ八と稱する俠客或時道中にて之も有名の博徒緋號仙臺といへるに行遇ひしに仙臺に平ッ八の名聲あるを心憎く思ひ居たるとなれば平ッ八に向ひ男同士の出合ひに只も分れられまいいざ尋常に立會はれよと理不盡なるを言ひ掛け脇差の目釘を濡し身構へたれば傍の者共は平ッ八は六十餘の老爺なれば如何すらんと思居たるに平ッ八は承知し待たれよと答へながら身拵へして路傍の大石に唾を吐きかけ徐かに爪を研ぐ故傍の者は何するぞと問へば我には刃物の用意なし殊に彼れ如

きに刃物はいらす今爪を研ぎて引搔き呉る、なりと云ひければ合手の仙臺も餘りのとに思わす笑ひ出し立會の勇氣も脱け且つ其勇膽なるに驚き刀を收めて和親を約せしといふ

◎急の一聲

力自慢の細君あり常に良人を蔑し一日争て良人を組伏せ喉を締めて曰く究ども云へまいがど良人苦痛を忍び殊更にキウの一聲を愛す細君思はず失笑して其の手を放つ

◎二刀兩斷

昔時某藩にて三勇士を何かの罪科より死刑に處せしとあり勇士等死刑の不平なりしか將た其勇氣を後世に傳へん爲めか始めの一人死に臨んで曰く我頭の離る、や直に眼前の草の葉に噛め着



四十九



四十八

んど之を斬るに果して然り次の者又曰く我は眼前の石に噛み着くべしと又言の如し末の者曰く吾は獄吏の膝に噛付くべしと獄吏大に驚きしが忽ち一策を按し先づ刀の脊にてヤーの一聲と共に力を極め罪人の首を打ちしかば罪人はつと首を延せしかども未だ首の斬れざれば心の弛むを猶豫もなく返す刀に斬付けたれば難なく首は前に落ちたりといふ

◎此話の風味は何んなものでせう

英國著名の文學士チャールスラム氏は曾て其寓所を距ると百哩許りの近村に旅行せんと乗合馬車に打乗りしが合客の中一人の俗人あり此者兎角黙居するとの出来ぬ性質を有すると見之氏に向ひ無遠慮にも種々譯けも分らぬ問題を起して話し掛るにぞ氏

も初めの内はよい加減に答てありしが終には如何に説明しても了解すべしとも思はれざる理學上の問題に移りかば氏も蒼蠅事に思ひ立場もあらは他の馬車に乗り移らんと心組んである内忽ち満望田野の場所に到りたれば右の俗客は學士を煩はすの一間題を提出し來れり即ち其間に曰く「今年の如き天氣續きの時候にハ胡蘿蔔の風味は何んな者でせう」學士は意外なる問あ遇ふて蒼蠅まぎれに答て曰く「ソレハ勿論肉羹の料理加減に由るに相違ナイ

◎心のまゝ

假令姑が鬼でも蛇でも主を育てた親じや者「良人大事と思ふなら姑は尙更大事ならずや然るを嫁の不束から姑の怒を引起し小

言八百六阿彌陀から近所合壁へ吹聴されては嫁も忽ちやつさとなり嫁「イヤカニ私しが我慢して嬉嫌氣襦を取れば逆朝夕箸の上げ下し小言の絶間は有ませんもう〜逆も辛抱が出来兼ますと媒人に取て掛れば嫁「ソ〜でもあろうが底が辛抱何も貴嬢は婿殿に嫁「サア良人に不足は有ませんが何分姑が……だからいづそこうしてと耳に口當てひそ〜話し媒「ソレシヤ姑を殺す氣か嫁「サア罪な様では有ますがどうも脊に腹は更へられませぬ貴君は醫者故毒藥チ……媒「メカ今迄折合の悪るい中で姑が頼死したと云へば世間の噂が入釜しい先づ一月か二月は無理も小言も聞流して打て變つた孝行嫁と云はれた上デ……十合點か砒霜を加へま此の毒藥これをと渡して歸しやりしが扱四五十日過

さて後嫁は再び出て來り嫁「今迄邪見と思ふたも皆私が至らぬゆゑ此間から氣を付て大事に仕へて居りますれば姑も心柔らげ嫁女〜と上嬉嫌それを自分の勝手から殺さうと迄決心した吾身の罪が空恐ろしいと讖悔たら〜藥を返せば媒人は横手を打ち媒「大方そんなことだらうと考へ付いた毒藥は種を明せば和合湯底へ加味した勘忍五兩一家の和合疑ひなし誠に芽出たし々々と云はれて嫁は益耻じ入り是より家内親睦せしとは、ても争はれぬ藥の効能明治百年に發賣する國米氏の頓智丹はこう云ふ藥でも有うかい

◎人を茶にす

讚岐の平賀源内(風來山人)幼にして聰敏機智に富めり或る時國

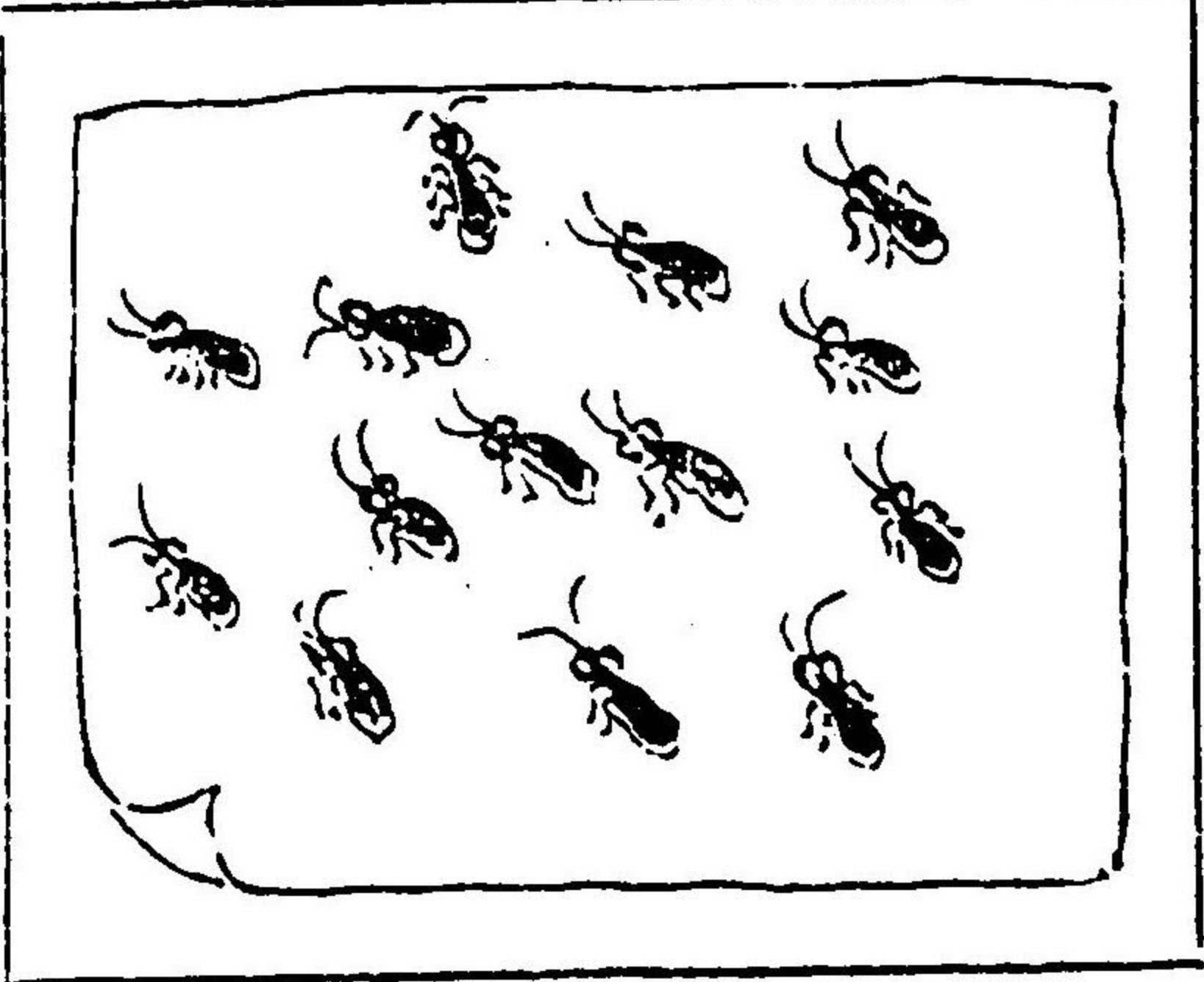
老某出勤の途上源内の路に戯る、を見て之を愛して曰く阿兒我家に過れば舗ましむるに菓を以てせんと源内仰見て曰く阿翁我家に過れば飲ましむるに茶を以てせんと聞く者大に駭て之を尤めしに源内笑て公事には尊卑あれども私事には貴賤なしと答へける

◎孔雀がへし

梁の楊氏が子九歳にして甚聰慧なり孔君平其の父に詣る父在らず乃兒を呼び爲に果を設く果は楊梅なり孔兒に示して曰此是れ君が家の果なり兒聲に應じて曰く未だ聞かず孔雀は是れ夫子の家禽なることを

◎腐草のみ汝を生まんや

英國兩皇孫殿下は西京御滯留中洛中洛外の名所舊跡を始めとして叡山及び丹波龜山の舊城をも巡覽され一日同所有名の書家を御旅館に召し集め席上にて頓張りの絹地に書を望まれし徳望月玉泉氏は紅葉に、雞、鈴木松年氏は菊に、蟹、池田雲樞氏は玉堂富貴、久保田米僊氏は猫、外に玉泉氏は御好に應じ雙鶴を寫し又衆門人の合作も有りしに兩皇孫殿下は大に稱譽され又戯れに繪直しを始めたる時皇孫殿下自ら筆を下し乱點をうたれしを米僊氏は直に螢となし、かば皇孫殿下も東伏見宮も其の頓智



を感歎されたりと

◎楊州の鶴

藩祖伊達政宗公相馬氏を攻むるや軍利あらず敵兵大に至り公を擒にし將に之を殺さんとす公の臣伊東肥前盛装して其傍を過ぎ顧み呼んで曰く伊東肥前汝將に茲に死なんとするかと敵兵之を聞き謂らく是政宗なりと争ひ之を追ふて公を顧みず公依て免るゝを得たり

◎梅檀橋も二葉町より

小式部内侍は大江雅致の孫にして和泉式部の女なり年五歳の時乳母の懷に抱かれて寝たりけるが誤りて足にて乳母の衣を引裂きしに乳母之を尤めければ

いつしかに、誰が玉章の、通ひ来て、

ふみ裂く音の、懷にする、

と應へければ父母は言ふまでもなく乳母も殊の外喜びて其より慈みは一際増りしとなり

◎破壊論の實験

先頃某所に開きたる演説會にて辨士某は演壇に登り得意の雄辨滔々と既に央ならんとせし時如何なる機會か手に持ちしコップを誤て壇上に落したるにコップは粉な未塵に碎けたり傍聴人は咄嗟とばかり思ふ時しもあれ辨士は一層聲を張上げ「尙し熱心の餘り日頃の鬱憤破裂せしならば即ち此コップと同一再び之を如何ともすべからざるなり云々と聴衆一同イエースヒヤ〜

◎下手の長談議高座の妨げ

愛爾蘭十黨の首領として名聲赫々たるパーチル氏は千八百七十五年初めて議員に撰擧せられし人なるが當時愛蘭の英政府に反對し百方力を盡して愛蘭の幸福を全ふせんと圖ると雖も常に多數の爲めに壓倒せられ其素志を達するを得ざりしが偶々氏が撰擧せられたる年の四月下旬の事なりき愛蘭黨當時の首領バツト氏は何か都合ありて議案の決議時刻を延ばさんと欲し同黨員ピツカー氏に耳語して成るべく長き演説を求めたるにぞピツカー氏は元來訥辨極まる人なれども剛毅不屈の性なれば頓て諸種の參考書を提げて悠然起立し演説を始めたるが議論幾ど盡る毎に政府の報告又は決議録等を朗讀し枝葉に亘りては又本論に

入り議員皆欠伸して議場を去れるをも顧みず遂に四時間の長演説をなせりパーチル之を聞きて所謂らく現今の情勢如何に道理を以て争ふと雖も遂に勝を制する能はず只此一怪策以て反對黨を折くに足らんと爾來深くピツカー氏に結び政府の議案出づる毎に兩氏共訥辨の長演説を以て議事の進歩を妨碍したりしかば後には二氏の起立する毎に讒謗罵詈の聲四方に起れるのみならず反對黨は勿論自黨の者に迄疾惡を受けしと雖も恬として顧みず千八百七十七年ギスレー氏の内閣が南亞議案を提出したる時の如きは幾多の修正説を出し例の手段を以て引續き二十六時間の大議論を現出せり此策は敢て愛蘭を利益すと云ふにわらずと雖も反對黨の鋭鋒を挫折すると鮮なからず最初冷笑擯斥

したる者も追々悟る處あり同年の末には首領ハット氏を廢しバ
ーナル氏を推して首領となすに至りしと云ふ

◎老爺も助手の一人

伊賀越警討の當日荒木又右衛門は渡邊數馬の行衛を尋んど數馬
くと呼はりく息を切て驅行程に町の左右の屋根の上には大
勢見物して有しが皆々あれ向ふの袋町の門前なり西へ行かれよ
くと言へども聞こへぬ事なるか北を指して行かんと爲すを或
老人は機轉を死かし家根の上より土塊を礫となして打付けるに
荒木が小鬘に當りしかば振仰向て見る處を彼老人は指を差し西
の方へ行給へ袋町の門前なりと教へけるに荒木は喜び這は有難
しと一禮し西の方袋町へと取て返し數馬の危急を救ひたり

◎陰謀にて印判を檢す

大坂冬の役其成を行ふや前將軍家康使者を擇び入て誓に蒞まし
ひ板倉重昌妙年にして選に中り城に抵る豊臣秀頼將に誓書に印
せんとす重昌直に前み膝下に逼り右左を願て曰く聞く公英姿
魁梧膝蓋の大扇の幾摺に及ぶべしと願くは拜觀して以て關東の
士に誇らんと因て扇を開いて之を度る而して其實、印判を檢す
るなり

◎醫やはや

意地悪い醫者が或る病婦人に向ひ奥さん婦人が極樂に居ることが
出来るなら其辨舌で地獄にするでせうと言へば婦人は醫者が極
樂に開業が出来るなら直ぐ様荒原にするでせうと答へたり

◎推し量り

一兩年前佐賀市街の某寺にて徴兵適齡者の検査を爲せしに例の徴兵嫌ひなる者ありて偽啞となりしが検査醫は蓋し偽啞ならんと推量し試に其若者に魔睡劑を懸がせしかば之が爲め若者は夢中になりて何や彼や種々なる譚話を吐きければ終に偽啞の計略も水泡に爲りしとぞ

◎夏木立

一枝の薔薇 先づ年武名を北方に揚げて威勢赫々一世を睥睨なせし某子爵會て特命を帯びて北歐の大國へ仕しけるとあり名譽高く才智優なる方なりければ上下の覺最愛たかり之由にて時々九重の御邊などへも召させらるゝとさへありけるが一日の事

どか宮中に立食の御催しあり當國の内閣諸大臣を始め朝野の紳に併せて各國公使等をも招かせられたれば某子爵にも又御陪食を仰付られ御席に連り玉ひけるが聴て曉々たる音樂の聲に連れて舞踏の會を始められける翠袖翻翻銀影楚々として簾浪春深く融々たる極樂の天地誠に仙宮に遊ぶの思あり會終りて國の皇后御宮には進歩緩かに御階の下へ降立ち給ひ一同を麾かせ給ひたれば子爵にも席を立て御後邊にぞ附従はれける陛下には尊顔を殊に麗しくこゝかしこと御徘徊遊ばされける序玉歩の傍近く笑を含みたる薔薇の花ゐるを見そなはして最も清く最も艶やかなる一朶の香を手折らせ玉ひ御手づから子爵にぞ賜りける子爵は一代の面目身に餘るまで尊く有難く覺ゆ前み出て拜受せられし

かどをぞや此宵着用せられし燕尾服には此御賜物を挿むべき鈕
 の飾窩なく唯糸もて微かに其形を造りしのみなれば咄嗟とは思
 はれたれど平素敏捷なる方におはせば角をかりの事に狼狽らる
 べき静に小刀を把出して擇びに擇びし上等仕立の服へ惜氣もなく
 窩を穿ち此優渥なる賜物を挿みて聖恩のゆたけきを拜謝せられ
 しかば陛下には歎感ましまして扈從のものに私語玉ふやう彼を
 愛し彼を慕ふの餘り其戀愛の情を表せばやとて與へたる花の却
 りて彼に耻辱を感せしめしこそ安からぬ然りとて彼の鋭敏なる
 少しも狼狽せし容子なく花を受て迷ふ所なかりしは英雄の胸中
 自ら縛々たる餘地のあればなりとて太く稱揚遊ばされ玉ひたる
 よしなるが其後の立食夜會といへば他國の公使縉紳は兎も角も

子爵は必ず御招きに預りて陛下の恩顧を蒙りしかば離合集散は
 免るゝによしなく子爵には官命を帯びて我朝に歸り他の人これ
 に代はりて該國へ着し陛下の拜謁を賜ふとありしが陛下には特
 に言葉を設けて嚮に公使たりし某は恙なくであるや否やと問は
 せ玉ひし然るにても至尊至高の御寵をかくまで深く蒙りぬる某
 子爵の譽れこそ優にいみじけれと世の人語り傳へけるとなん

◎是れ藥香の本旨ならん

昨年春頃佛蘭西巴黎府に於て某商家に婚姻の事あり親しき朋友
 親族を招り盛んなる宴會を開き巴に夜も深更に及ぶ頃此處に現
 れ出たるは年齢十六七計なる愛らしき花賣娘なり一座の貴嬢紳
 士等はこれを見て這の好き折にこそ來りつれとて皆な争つて花

を買取りたり斯くて娘は中に最も麗しき花環一束を持ちながら
 花婿と花嫁の並び座したる前へつかくと進み寄りよと見ゆし
 が俄かに花環を擲棄ると均しく籠の内に匿したる一箇の小壘を
 取出し内に入れたる緑色の薬水をば新夫婦の天窓の上より灌
 ぎ懸けたり此有様に一座の歡聲は急に叫聲と變じ花婿花嫁二人
 の愁傷は大方ならず涙を流して云るやう吾々が運命も早や是ま
 でなり吾々は如何なる不具片輪の面貌に爲されけんとして哭死叫
 びたり暫くして花嫁の父なる人出來りこの娘を片腕に招いてそ
 の暴行に及びたる仔細を問ひたるに娘の云へるやうは妾は三年
 以前より此方の新聲と互に相愛して過せしに男の心と秋の空薄
 情にも妾を棄て、この婚姻胸の焰の絶やらでこの復讐に及びた

りと涙ながらに物語れり斯くする間に招きたる醫師も驅つけ新
 夫婦を檢したるに其灌がれたる水は青にして毒物の如く見ゆれ
 ども能くこれを檢査すれば無害なる流動物なりと判断したりそ
 の中に巡査も出張し嚴しく薬の出所を尋ねたるに此薬水は近
 傍の薬種屋にて買求めたる旨白状せん因て巡査は直に右薬店に
 赴きて取糺せしに薬店の番頭等答へて先刻一人の小女來り毒藥
 を求めしも其様子怪しく見ゆしかば敝店に於ては或は過ちあら
 ん事を恐れ只だ淡水に緑色を施しこれを毒藥なりとして奥へ
 置き後の御沙汰を待居りしなりといひたるよし薬店の計ひも亦
 妙と云ふべし

◎ 頼智丸の水夫

或少年が水夫にならうと思つて船將の處へ行つて頼むと船將は一番いぢめてやらうと思ひ少年に一本の繩を渡し「モ、御前がい、水夫になりたいと思ふなら此繩へ三つの末をつけて御覽」と言ひましたそこで少年は些しも動せず「エ、出来ませうとも、まづ此繩兩端で末は二つありませうそれから之を海へ投げて仕舞へを三つになりませう」と言つて繩を海へ投込んで仕舞ひました船將は感じて水夫に雇入れました

◎花嫁の替玉

麴町邊に住む或る華族の姫様は今年十六と二ヶ月計り御兩親が大の昔氣質にて西洋ものは座敷へも置かぬと云ふ舊弊家姫さまは某女學校へ通はるゝ丈けにずんと開けた生徒交際生心のつい

た頃から些と開け過ぎたといふ風情もありしが果してお屋敷の近邊に寄留する和歌山縣の書生に妙な教へを受けられたとを兩親は更に知らず今度同族中の某子へ縁談が出来来る二十日に目出度婚禮といふ其前夜になりこは什生姫様の行方が分らぬゆゑお屋敷は上を下へと大騒ぎ八方へ手を分け探索をまたなれど更に分らぬうち車夫の八内が姫さまは那の書生と云々だと申立たてたので早速書生の方を聞き合はせると果して書生も同夜出たきりにて宿へ歸らぬどの事ゆへ彌々夫れと分つたが差詰め明日の晩の婚禮にと兩親は大當惑何うしたら宜からうと青くなつて居るを親族中に磊落の聞こへある某か聞きつけ委細僕にお委せなさいと引受けて置き翌日になると豫て自分が愛願にする新橋

の藝妓お何は豫て姫様の顔に似て居るを幸ひ連れ歸り式の通り綿帽子を被せ姫様にして一族方へ連れ行きサア盃といふ一段になつて密に其の花嫁と兩親を一室に招き實は某家の姫は云々の譯だから今夜連れて來たのは替玉です併し今是れに腹を立て彼是仰しやつては兩家の名譽にも關係する譯なれば今夜の事は此の儘に黙つてお濟しなさい婚禮を擧げた事にしておをさめなさいと平生得意の辨舌にて説きつけたゆゑ先方でも腹を立て、事を分る日には名譽上に關係する譯と據處なく某の云ふ通り婚禮をした體にて其晩をすませしが兩家では目下姫様の所在を搜索中との噂

◎收税官が酒税の検査

ち地方税規則に照すときは飲食店に於て酒小賣をなすには別に其營業税を課すべきものなるが此頃栃木縣下某宿の或る飲食店に於て營業税を納めず竊かに酒小賣をなす者あり検査員之を發かんと欲すれども容易に其實を肯せざらんとを慮り飲食店に至りて突然店隅の徳利を指し其方の店にては徳利を販賣するやと尋ねしに主人は意外の尋問なれば前後を考ふるの暇もなくいや夫れは酒を買ひに参りし者へ貸しますものと答へしとぞ

◎置きみやげ

遠州城東郡高橋村に赤堀五藤治なる弓術を以て知られたる人あり壯年の時某所に於て博徒の親玉數輩と賭博をなせしが殊に運よく數回全勝を得たれば一同氏を憎て之を殺さんと耳語け

り氏竊に之を覺り如何はせんと思ひし折り丁度氏の賭博具使用の役なるを幸ひやから其具を席へ置き懐剣を拔出して其上に載せ静に曰く我れが小便を終りて来るまで少しも動すと勿れと立出ければ人皆其詐りなりと知らず暫く待ち居りしに何時迄も来らざれば皆出で見るに其影もなかりしと

◎畫を殺して工を救ふ

ゼームストルニルは英吉利の畫工なるが嘗てシントポールと云ふ大寺の壁に繪を畫き足場を高くかけ日々筆を揮ひしが或日自ら其繪に眺め入り思はず知らず少しづつ、後の方に寄り果ては今一步にて足場の端より數丈の下に落ちんとする危き場合に至りしを傍に居たる召使の者見るより大に驚きたるが飛掛りて止む

る暇もなければ持合せし繪具の皿を矢庭に壁の繪へ投げ付ければトルニルは驚き且つ怒りて繪の方へ進み寄りこは何事ぞ不届者として召使の罪を責めんとしたるが其舉動の次第を聞れて再び驚き深く其機轉を感じたりと

◎短氣怒氣人氣

大阪の俳優中村宗十郎が東京新富座へ過ぎる年出勤し居たるとき内職に米相場に關係し居たるとは世人の知る處なるが或る日忠臣藏の役割にて桃井若狹之助の役を引受け今や舞臺へ出でんと爲し居たる折柄自宅に残し置たる番頭があはたしく宗十郎の部屋へ駆け来り……親方大變が出来ました、あなたの相場の御見込が違ひまして多分二三千圓の御損になりませうと知らせ

ければ短氣の宗十郎なれば例の如くツツと憤りたれども今更せんすべ無く其儘舞臺の花道に走り出で……己れ師直真ツツと叱する所を演じけるが相場失敗の怒氣が満面に現はれ之が爲め若狭之助の意氣込が一層強く眞に逼りたる有様なりしかは當日は特にヤンヤと云へる大喝采を博したり其後ヨク／＼聞けば相場失敗の件は真ツ赤な偽りで實は宗十郎ヒーキの或る粹士連が賭にて同人の人氣を得せしめんが爲の策なりとぞ

◎人を誹らば穴一つ

ウエンデルヒリップなる人は常に亞非利加黑人の世人に虐待せらるゝを慨き黒人と雖も元と是れ白人と毫も異なる處なき人間なればとて之を救ふとを以て處世の目的となし居りしが或時一

人の高僧、氏に告げて曰く足下若し黒人を救ふを以て一世の業となさば寧ろ南方黒人の本國に移住して之を實行することをよけれ何んぞ遙々數里を隔りたる地にありて漫りに空論を唱ふるの迂なるやと氏答へて曰く高意忝けなし然れども移住の事に尙少しく熟考を要するあれば他日を待て之を決せんそは兎も角も足下は何を以て生涯の業となす歟と高僧答へて曰く余は衆人をして地獄の苦を免れしめ天堂極樂に登らしめんとを以て處世の目的となすものなりと氏曰く然らば何ぞ速に地獄に至て足下の職を盡さざるやと

◎我衣では露に濡れつゝ

吳王荆を伐たんと欲す舍人孺子之を諫めんと欲すれども諫の入

らざらんことを憂ひ朝毎に園に出で、嘆き悲しみければ吳王召して其故をどう儒子曰く園に雀多く集り居たる故之を取らんと欲し園に行きければ之を取らんと欲するの慾の爲め衣の草露に濡さる、を知らざりし故に悲しむなりと吳王之をさとり荆をうつとを止めしと云ふ

◎智慧の有るか無いかを検査

試験官が土木學校の學生に向ひ「あなたがぼんぶを作つて人手を借らずにすつかり仕上げ十分に出来上つた上それを瓶へ入れて見るとちつとも水を吸上げません時にはどう爲さる」と尋ねるとその時には瓶の處へ行つて水が有るか無いかを検査します」と答へましたから試験官は其學生を及第者の中へ入ましたい

◎負けぬれを勝

正歴二年五月廿八日攝政殿右近の馬場にて競馬どつがひを御らんじけりそのとき山の井の大納言儀同三司共に中納言にておはしけるを左右に分けて公卿おはく参られけり一番は左の將曹尾張の兼時右の將曹同敦行が。つかうまつりけるが兼時が轡たびくぬけたりけれどもおつることばなかりけりさりながらもつひに敦行勝ちにけり兼時敦行にひかひてまけてはいづ方へ行くものぞといひたりけり人々その詞を聞き感じて纏頭したるとなにかたり傳へたるいまだ競馬にまけざりけるものにてかくいひけるなれをいと興あるいひやうなるべし

◎一座舌を牧野忠鎮氏

越後長岡の城主牧野備前守忠精公の長子忠鎮氏は温原大度の氣
 質にて幼少の時より畫に妙を得られ文化年中七歳の秋父忠精公
 と俱に鹿兒島の城主松平豊後守齊興公の邸(即ち芝新馬場)へ
 赴かれしに主人齊興公忠鎮氏に虎を畫きて予に與へられよと曰
 ひつゝ自ら紙に筆墨を添て持出で來られしに忠鎮氏に憶する色
 なく件の紙を敷延ながら筆に墨汁をひたし紙へは虎の頭をのみ
 一面に畫らる身體と手足は數枚の疊へ涉り其の筆勢凡ならざれば
 齊昭公も思はず手を拍れ「大名の子孫たるもの斯く大器を有せ
 ざれば世に立難しと大いに賞賛せられたりとぞ

◎僧

或る時前の愛蘭事務大臣バルフォア氏一人の愛蘭の僧に問

ふて曰く新聞紙上には近頃喧しく余を惡魔の如くわしとまにい
 ひなせども御身には余を實に愛人の憎む所なりと考へ居らるゝ
 やと僧答へて云へるやう愛人をして若し閣下を嫌ふ念の半分位
 丈けにても惡魔を憎ましめなば愚僧が職務も試に閑暇なるべし
 といひしとなん

◎馨りある臭聞

肉付の貯金 南區九郎右衛門町第廿二番地席貸業岩井よね(三十一)
 は雇婆々と僅に二人暮しなれども豫て貯たる臍線金今は積つて
 何百圓といふ額になつてあるなど、隣の寶を算へる世話焼連中
 が評判したるを聞込みてよりの事り去十九日の夜三時頃面部を
 包みたる大の男何處よりか押入りおよねの頬に冷やりとしたる

出刃庵丁を押當て例の臺詞にてサア金出せと迫りしにおよねは
 がばと起るより即座の氣轉に腹痛を起し、お腹が下痢さうな假
 令お金を出すにも一寸便所へ往てからでなくばと起かゝるを賊
 は引留め、爾うはならん先づ金から先死に出してと強て箆筒の
 前に引きゆかれておよねは是非なく抽出しを開るや否や百三十
 圓許りありし紙幣を手早く懷中に隠し銀貨銅貨取交せ一圓五六
 十錢の端金を賊の前に差出し私方には五十や六十の金は無いこ
 ともなければ皆郵便局の貯金に預け今はこれだけよとない云
 ひながら猶頻りに腹の痛む體に雪隠へ飛込み彼百三十圓の紙幣
 を糞壺に投込み再び出來りて此上は着類でも何でも勝手次第に
 持歸られよ金といふては此外に一錢もないといふを賊は事實と

思ひ纏に一圓五六十錢づけの仕業をして立去りしが夜の明るを
 待兼ておよねは糞壺より彼紙幣を取り出し上包の紙を捨て糞中の
 汚れたる方をも一寸洗ひ早速郵便局へ預けにゆくと貯金掛の吏
 員は元より其場に居合す人々も何やら臭いといふゆゑおよ
 ねはちと臭いかも知れません實は昨夜斯々と事實を語りしに貯
 金掛の吏員は天窓に手を置いて暫く見詰め漸々に抓み寄せて其紙
 幣を指の先にて算み居たりといふ

◎かしかまし

往昔平家の勢ひ盛大なりし頃薩摩守忠度いかなる宿世にや内裏
 女房と深くも契りける通路も繁けるが或夏の夜平常の如く忠度
 は夕間暮より彼女房が許る忍び行けるに折柄一院ましますにも

心付ず忠度は扇をばつかうて要のキリくと鳴にければ一院は
不審にぞ思はれける氣色の見へしにぞ彼女房扱はと心得てのも
せと謂しにぞ音やみぬ是は源氏夕貌の巻に「かしかましのもせ
にすづく虫の音よ我ぐにものはいはでこそおもへ」とあるの意
を取りしものなり是等は一寸風流頓智にこそ

◎利害論の比喩談

米國獨立戦争のとき英將某軍艦を率ひて亞米利加の海岸に上陸
せしが偶々其近傍に森林の蒼鬱たるものありて多くの良材に富
めるを視認め副官に對ひ低語して善い哉此良材を伐り取りて軍
艦其他の戦具を製せば英軍の利蓋し少なからざるべしと云ひし
に時に兒守りを爲せる少女傍らに遊び居て之を聞き心竊に所謂

らく此良材を敵手に付しなば米國兵の不利なると推して知るべ
し如何になさんと案じ煩ひまが英將等の立去りたるを窺ひ枯葉
を掻き集め火を放ち全林を焼き盡せり。其後日ならずして英將
は樹木を伐り取らん爲め大工人夫を引連れて來りしに何ぞ圖ら
ん全山赭赤に變ずるを見て喫驚呆然

◎斯いはしやれたが基

鱸は餘り上品なる魚にあらねば上等社會の膳には上るまじき
に彼の才女紫式部是を喰しけるに左衛門佐宜孝外より歸りあ
ふて之を見賤し物喰たもふと笑ひける式部取あへず「日の本
にはやらせたまふ岩清水まいらぬ人はあらしとぞおもふ」と詠
めければ左衛門耻る色ありしと其れより此名始るといへり

○鷺 ミューニツヒ某女献納

獨逸國「ミューニツヒ」府の或家の下婢一日主家の稚兒を花園に遊ばせ居たる折から忽然巨鷺大空より舞ひ下りて其稚兒を攫まんせり普通の婦女ならば唯狼狽して泣死叫び空しく稚兒を鷺の餌食となせしならんが此下婢頗る膽略ありて危急の際速かに肩掛を取りつし鷺の上にかぶせ掛けしに鷺は之が爲めに眼を蔽はれて唯に稚兒を攫み去る事を得ざりしのみならず又飛去る事能はず下婢は之を見て直ちに飛びかゝりて鷺を捕へんとせしに鷺は死力を出さずして争ひしも下婢は少しも屈せず他の人の助けに来る迄確と捕へ居たり此争の爲め下婢は傷を受けしが時の女皇は其勇氣忠義を賞して若干の賞金を與へられ鷺はニ

ンブルグの動物園へ送られけるとぞ

○去りとは御師が強い

往時伊勢大廟の神官を御師と云ふ内宮外宮を合せ凡そ數百名あり強大の勢力ありて山田奉行の威嚴も以て之に當る能はず猶は白川法皇の山法師に於るが如し一日御師奉行某に迫て曰く我等職を大廟の神官に奉し而して官位なきは大廟の尊嚴を瀆すに似たり足下之を朝廷に奏し我等の爲めに官位を請へど某心中其の非望を憎むと雖も敢て之を請らず諾して還す己にして又來り之を促す某伴つて曰く朝廷足下等の請を容れ許すに守の字を以てすと蓋し御師の名字は概ね美濃、土佐等の國名を用ふるを以てなり御師等大に喜び拜謝して將に去らんとす某急に呼で曰くカ

○の字は正に許したり然れども之に○の字を附するを許さずと
御師等既に美濃ノ守、十佐ノ守となり諸侯と均しき稱呼を得たり
と思ひたるに○の字を省けば美濃がみ、土佐がみとなり、半紙の
如き名稱にては面白からじとて遂に之を辭退したりとぞ

○雙方黑白なし

往昔中津藩の配下に某村あり村内の右族皆佐藤を以て姓と爲し
自ら云ふ佐藤忠信の裔なりと偶々他郷より移住する者あり産を
治め家を富まし三代に至りて子孫大に繁殖し一族分れて數戸と
なる是に於て村内の族と凌ぎ自ら佐藤氏を冒す右族等怒て其系
譜を詰問す其人答て曰く僕卿等の同宗に非ず然れども亦一個の
佐藤氏なりと右族等又詰る能はず既にして村祠の祭祀に會し競

ふて彩燈を掛け皆其姓名を書す新佐藤一族又之を掛く舊佐藤の
黨與憤懣に堪えず密かに子弟を煽して之を毀たしむ新黨大に怒
り遂に之を藩廳に訴ふ廳吏慰諭して和解せしめんと欲するも兩
黨執拗にして命に服せず廳吏曰く汝等強て之を區別せんも欲せ
ば吾に一法あり宜しく之に従ふべし皆曰く諾廳吏曰く他なし舊
佐藤の上に白の字を加へ新佐藤の上に黒の字を加へ黑白を以て
分たば乃ち新舊の區別判然たらんと一同沈思之に久ふして曰く
貴命の如くすれば我等の姓は黒砂糖白糖と音相通するに至ら
ん然らば則ち之を區別せざるに如かずと事遂に止む是より復た
姓を争ふ者なしと云ふ

○折半とは中裁の言

某夫妻あり一日或事より紛争を起し遂に妻は自ら離別を乞ひ且つ曰く此身代は我々二人の共有物なれば財産の半を持行かんと夫も妻の大に成業に力ありしを以て是を否む能はず且本心は離別を好まざるものあれば即ち一計を考出して曰く然らば財産を分與せん併し此資財器具を今價值に評して半するべし汝は若し後日物價の變動に依り或は我が分有の器具價值を増益し汝が配受の家財價值減損せしむ計り難し然るときは汝必ず悔ゆるとあらん余之を慮る故に價值を用ひずして悉皆の器具を折半せん先づ簞笥より始めんとて銀を持出し切斷せんとするに妻は大に驚き我が過を謝し離別を取消したりとぞ

◎平氣の平は平安の平

一家あり一夜盜賊人來る主人在らず賊家婦を圍繞して金を出せと云ふ家婦平然として曰くオヤ本夕は家主は公等の伴にあらずやと賊舌を鼓し、シツ内職の家ならんとはと、婦止めて火を燒き飯を供し而して竊かに隣人を馳せて之を警官に訴ふ賊終に逃がる能はず悉く捕に就きしといふ

◎後見の意見謬見を和す

至極妙法 鼻の下の日本橋區蠣壳町邊の或る大店に數年來奉公せし伊助(三平)といふは何處か遠い田舎から來たものにて家族親類も死絶えて別に便る方のない代りには養ふべき厄介もなくは人の一本立で何處へでも養子に行れる身分なれど成らう事なら火打箱程の家でも構はぬから一戸名前の主人となり先祖の祭り

がしたいといふので主家の後家お何(調子)が其志を賛成し今年
 一月中旬より其近邊へ暖簾を分け一かどの家主にして遣たは抑
 々故ある事にして後家は疾より伊助の男振りに思ひを懸け斯く
 別家させしを恩に被せ否應いはさず口説允落したうへ下女の
 人もあつて折々人目甚なき別家へ遊びに行く振りをしては
 思ふ儘に楽しまんとかく心のあるなれば今日やいはん明日や
 言はんと隣隣ふ間に伊助は當地の知邊にて日常世話になる方
 り嫁を貰ひ以て其恩に報ひんどのとを番頭其他へ相談せしに何
 れも異議なしとの事ゆへ直に之を決行し新夫婦の事とて外目に
 見るさへ浦山しきまで中のよい様子を見て後家お何は失望と嫉
 妬が胸へ込上げあれ程可愛がつて遣る妾をさしおき誰に相談し

て嫁を貰つたと餘りといへば思知らず斯様不心得な人に暖簾を
 分けては行末が案じられるゆゑ早々暖簾を取上て元の素丁雅に
 下るがい、と以ての外に立腹したので伊助は大いに心配し本家
 の後見何某に何うしたものと相談せしに後見は後家に一物ある
 事を知れば夫にはよい工面があるとして計略を示し一夜少しの馳
 走を設けて後家を招き其席へ伊助をも呼びさして伊助に向ひ聞け
 ばお前は立派な嫁を貰ひながら外見は睦じさうに見けれど一度
 も枕を交さぬといふが何故だと戯談半分尋ねるに豫て謀し交せ
 し事とて伊助は頭を掻きながら世帯向の爲に女房は貰ひました
 が實はナト譯あつて十年が間女に肌を觸じどの願掛をしまし
 たが其譯は死でも言れませぬと左も辛さうに語りしかば後家も

到底畫餅と諦めたか夫よりは以前に復し何にも言ぬ様になりし
とぞ後見の頓智策略天晴く

◎兄は俄に啞となる

醫師の兄が隣りの爺の耳聾を笑ふと爺は怒りて「汝の弟が立派
の醫者であるなら此病を癒して呉れるかも知れんが何分惜しい
とじや

◎かみを佛と思はせて

本年九月三十日午後十二時前後と覺し頃二十七八の男が戰栗
ながら逢阪の關までのりしが行き來ふ人の無きより何となく心
細くなり蟬丸の詠歌を批評しつ、歩むに任せて進めども兎角後
に引かる、心地にて困り居る處へ老僧の來るに出會ひ其を見る

より進み寄り男「甚ぐ恐れ入りてのお願なれど私は京都二條の
茶商の亭主でありますが生得ての臆病者實は本日商用にて大津
へ罷り越し是非汽車にて飯る積りで居ましたに案外事調はず
最後の汽車にも乗り後れ車夫に頼めど深更故六ヶ敷と斷り詮方
なくなくも此處まで飯りしが誰一人の伽もなく貴僧に見放され
ては身の置場なく御無理のお願なれど粟田口迄御見送り下され
と拜むが如くに依頼するを無情に振り放す譯にもゆかず又頼み
を諾すれば二里の後と飯り如何せんと案じしが僧は懷より紙入
を取り出し聞けばお氣の毒の次第なれど拙僧とても御同然然し
幸ひ兼て本山にて災難除の守を戴け居れば其一枚を進せん此符
を懷中にして祈念を込めつゝ飯られれば更に氣遣なしとのとに茶

屋の亭主は心を勵げまし別れたり其れより亭主は一心に南無阿彌陀佛と祈念し乍ら無事に我家へ飯り妻にも右の次第を語り佛のお守りで無事に飯り先づ安心勿体なしと開きて見れば豈に圖らんや塵紙の一片など

◎中吉姓の由来

當金澤舊藩士の内に中吉某となん呼ぶ侍ありて如何にも其姓の讀方の珍しきが今其縁故を尋ぬるに此中吉家の祖先某は舊と豊太閣の家來にて其時分は尋常に中桐と書きし者の由然るに或時太閣が或大名の婚儀を祝せしため此中桐某を祝儀の使者とせられしより某は事の趣領承し其大名の許へ行死て案内を請ひ先づ其名を名乗りし上扱云々の挨拶了りしが頓て彼大名の取次言

ふ様近頃卒爾にも異なる事を申す様なれど今日は當方にて此上なき目出度き婚儀なるになかざりと云ふ姓のお使者を賜はる、は……と左も苦々しげに呟さけるが流石智將の下に愚卒なしと云ふ古語はあるかないか知らねと某はぬからぬ顔にていやとよ御不審は御尤もながら實は某の姓は中吉と書てなかざりと呼ぶなりと答へしが基にて干今幾代もかく續き稱へる者なりとぞ

◎炭火の引出物

舊幕の比執色の藩地なるか頗る乱暴の殿様あり淫酒に耽り人民の休戚を顧みず左右に美女を置き酒を飲みながら政を聴くといふ有様なれば家老某は常に之を憂へて屢々諫言すれども未だ聞き入れなき故或日も例の如く御前に出で之を諫言す殿様憤然

として曰く又も慮外者奴其處下れと家老退かず雙眼に涙を浮べ
 尙は諫めて止まされば殿様いよく激怒し下れと云ふに下らぬ
 か不禮者めと云ひながら傍に有り合ふ火鉢を取て擲ては燦んに
 起りたる炭火は八方に散乱しいとも結構なる備後表の壘に燃移
 りてあわや由々敷大事にも至らんとしけるにぞ近習の者大に狼
 狽し之を揉消しと立騒げば最前より自若として平伏し傍眼も振
 らず火鉢の方を視詰居たる家老は急に頭を擡げ血走る眼にて近
 邊を見まわし叱して曰く殿が賜はる炭火の引出物、汝等漫りに
 手を觸れなば殿の命に背くなりと近習等戰慄して敢て手を下さ
 ず流石の殿様是には一番閉口し「これよ己が悪かつた許せ」と
 と謝しければ其場事なく治まりて遂には其の行をも改めたりと

云ふ「火や〜」

◎虎の威を借る

或る老婆一人の家へ強盜押し入り例の文句で迫るにぞ老婆は平
 氣な顔にて吾が家には虎列拉病者ありて昨日死去したれば家財
 道具衣類迄明日はどうせ焼き捨てる物ですからお入用の品は何
 なりと御遠慮なくお持なさい其所の箆笥の引出しには風呂敷も
 ありますすお空腹ければ御膳でも上げましたしよとかと澄まし切つた
 挨拶に流石の強盜も膽を冷やし匆々逃げ去りしと云ふ

◎旨いで藝娼

予は寫眞を業とする者なるが或日何鶴と云ふ女の客來りしも藝
 妓ども娼妓ども分らされと都て當地にては藝妓に娼妓かと云ふ

は大に嫌ふ所なれば面前問ひもせざりしが其後二三日して寫眞を受取に來りしとき予は二階に居りたれば店に居たる家僕が大聲にて何鶴さんの寫眞は出來ましたかど問ふにぞ予は頓智は茲なりと思ひ何鶴さんと云ふ名は藝妓にも娼妓にもあると云ければ彼女は自ら我は藝妓なりと答へけり

◎感心神官頓珍談

士人、藥種屋、蕎麥屋、神官の四人集まり居る處へ十箇の餅を到來せるに一人が此餅只食ふも興なし各身分相應に「ン」の字を七つ付のと言ひたる者は一個宛取ることすべしと言ふ聲未だ終らざるに士人直に「しんげんけんしんせんぢらんらん」と言ひて一つを取る次で藥種屋「ぐわんさんるんたんさんかんをん」と言ひ

蕎麥屋は「なんばんらんせんさんせんはん」と言ひて又各一つを取るにぞ神官の我家胡麻を焼くの際半鐘を鳴らす其聲「ちやんぐわんさんるんたんさんかんをん」と残り七ツを取れり

◎只も捨てない拭て捨てた

平素怠惰なる書生あり或時博物學の試験ありしが書生は少しも下調を爲し置かざりしを以て試験の當日大に狼狽し一片の半紙へ重要な事を細書し之を懐中に入れ置け試験の最中私に取出し切りに答紙へ寫し居れり教師は怪しやと思ひけん「何某君其紙は何ですか一寸お見せなさい」生徒は騒がず「是ですか是の鼻紙です」と言ひつゝ、ふんと鼻をかみて打捨てければ何の答もなかりしと

◎是れ晝間熱心の致す所

余當夏筑豊に旅行せし時或町の一旅舎に投し食事も済して寢床に入りしが隣室には生書ども覺まき荒武者三名あり夜も早や深ければ彼壯士連夜具を命せしにやがて一人の下婢來りし途端に生憎やらんぶの火小簾もる風に消ぬけれを一人の男之れ幸ひ天の與へと思ひしか否は知らされども件の下婢を抱き倒し無理に一件を取行ひしと見ゑしが察するに此時他の二人は便用に立ちし後ならん下婢も左まで否ひ摸様はなかりし扱一幕仕舞ゑて女は直に樓を下れり玻璃燈は元の如く照り渡る他の二人も上り來れり一人の男は今迄着て居たりし浴衣を脱きて他の衣を着けたり二人は何故斯くは騒ぐぞと不審の思ひ入なり已に聞く梯子を

上る音とんくく一人の年増の女上り來り少し聲を低ふし「只今は此屋し女衆に御手を掛られオホ、有難ふ存じますオホ、何卒相當の御祝儀を」といひしに二人は敷から棒の唐突に呆れ一人は覺ぬわれども呆れた振り三人共に口を揃へ「そなたは狸か狐に魅されはせぬのか何をいふぞ」と取ても付ぬ荒言葉に女は少し腹立て「只今御床を延べに來ました節火が消ぬたを幸ひ無理に内のお〇をなされたではありませんか「否そんな事は僕等はしらん失禮を言ふな「イエ失禮は申しません之には慥な證據「何に證據、々々があるなら出せ「皆様の訣を、訣が何をしたのだ「後の證據に訣の先を含て濡して置たらうぞすから女と思ひ侮りて滅多な事は「サア之を見ろ」ハテ不思議慥にお〇

さんは袂の先といふたに「馬鹿な事をいふと名譽回復の訴を起すぞ」「へーい」と云て狐鼠々々遁げ出した後で一人の男が實は斯くくになりしも近頃は頼智協會といふものありて宮武さんが頼智の普及に骨を折らる、から女と云て見こなしはならぬ如何なる事を仕出來すも計られずと早速衣類を着替た譯なり果して此仕掛けありしか……はて油断のならぬ世の中なり然し頼智を以て頼智を搦く余も頼智戰場一方の大將となりて愧ぢざるべしと三人手を拍て笑ひしは一と間を隔て、聞き居し放膽居士も思はず失笑。折から女の聲にて「モト旦那御目覺しになりては如何さま九時でございます」……それでは今のは夢であつたか……アモマア埒のない……でも頼智は頼智に相違ない

◎風潮故太平洋と云ひし乎

拍手三稱某公が心事穿ち得て妙なりと冒頭に大書し來るは他にあらず東京日々新聞紙上に登録せる左の一奇報にぞあるは「久米の平内に何となふ似させ給へり」と云ふ評判高きやんご無死御方あり平生に手澤さる、烟草盆に婦女子がする縁結びといふものめさし紙捻の片を幾つとも無く結び付け置かる、を如何なる仔細にやと或る者の問ひ奉りしにいやとよ是は歴が日々に處分する緊要の事どもをちよいと書附て出頭する折に忘れぬ爲に斯くはするなりと答へられしにぞ問ひし者は恐れ入りて今に始めぬ御心入れは感じ奉るにも餘りあり然らば其紙捻の中に國會願望却下の御方案などもこれあるにやと再び問ひ

まひらせしに此度は何の答へもなく唯苦笑ひせられしのみなりしと「噫」或者が頓才何ぞ某公の心事を穿ち得るの妙なるや抑も某公が國會願望者の防禦法に神經を惱せらるゝの世評は實に今日に始まるにあらず一日某公には當時頓才智辯の聞へ高き某紳士を側近く招かれ國會願望者の防禦法を諮詢あらせられたるに某は畏りて左程御心を惱ませらるゝ事にあれば今日の不平士族等を驅て之を悉く蒸氣船に乗込ませ漸く太平洋の真中に至るを俟て其船底を抜かば如何某の防禦案は之を外にして別に妙計あるなしと答へけるに公は某も亦發狂したるかど語られたりとの一奇話あり而して世の識者は之を聞死て却て某を狂人視せず竊に其言の味あるを稱したりと云々、

◎半風子論

東坡一日秦少游と夜宴す忽ち身上の虱を得少游に示して曰く此れ垢膩の化成するものと少游曰く然らず是れ綿絮毛汚に成るなりと相辨する久ふして決せず東坡曰く明日同じく佛印に問ひ若し輸くれば一宴席を作さんと酒散す少游私かに佛印の處に至り其故を告げて曰く他日來り問ふとあれば只我が説眞なりと説け當さに飢餓會を作して席をなすべしと囑し去る少らくして東坡至り佛印を見て亦之を囑して曰く只我是なりと説け當さに冷淘會を作して席をなすべしと他日兩人相携へて到る佛印曰く曉り易きのみ是れ垢膩身を成し綿絮脚をなす先づ冷淘を喫し後に飢餓を喫せん衆大に笑ふと

◎天は人の作る處

澤庵和尚の甥なるもの常に遊蕩を事としければ澤庵或時之を戒めけるにいや世の中の事は天道次第になる者なれば勉むるも志るも差ひはあらずと答ふ澤庵之を聞てなるは世は天道次第なるべしされど天道はまた此方次第になるものなりと諭されし

◎逆

お髯の掃除を以て專業とする五斗米先生が何かな長官の御意に入りて電線を強めんとして「私は貴君が千年の御長壽をお保ち遊された夢を見ましたが何とお目出度事では御座いませんか長官殿は苦り切て「ナニサ夢は逆になると云から短命な兆かも知れ

ない、五斗米先生吃驚敗亡急に言葉を改めて「イヤ之は私の申違ひです私の見ましたのは貴君が千年の間お死去なされました夢を……

◎有る手から溢れる

家光公(三代將軍)或時お物見より御普請小屋を御覽ある中小役人の木材を盗み去るものありければ取締不行届なりと思はれしか顔色不興氣なるを見て土井大炊頭利勝進み出で、申す様大御所(家康)三河に御座あるとき屋根は傾き垣は頽る、も修補の暇なく此時に盗を賞すれば逆參る者あるまじき有様なりしが今は諸國より積出す材木山の如く假令一日に千木を盗むとも守る者も知らざるは是れ天下泰平國家豊饒の御吉兆慶賀を申上げ奉る

と恭しく言上せしに家光公も氣色を直されたりとぞ

◎姑の十八

兄がわんばくな弟に向ひ「ちつと兄いさんの様におどなしくなさい兄いさんがお前のようにならざらしたのを見たことはありませんまい」と云ふに弟は「私は見た事はありませんが親父さんやお母さんが見ましたとぞ」

◎一分百圓

「イ客助さん 私は此頃新身の短刀を求めたので試みて見たいと思ふのだがお前千圓の死賃で死で呉れまいか、客助は暫く考へて半死半生にして五百圓でわ如何でせふ」

◎奇言驚人

此頃某貴顯の許へ某氏が参りて談話の末某氏は〇〇財産を以て一私人の財産の如く見做せる口氣のありしかは貴顯ハ之れを聞き各め若し足下が左様に不埒なる考へを有するに於ては宜しく書付にして之れを出すべし予は速に之れを新聞紙上に掲げて弘く輿論に訴ふべし去りながら足下も前以て覺悟せられよ悪くすれば出刀庖丁の一本位は脇腹へ飛び込み來るも知る可からずと某氏之を聞き青くなりて立ち去れり然るに又た嘗て某女史が同貴顯に調し身上に就きて今に種々の異聞を傳へ妾をあしさまに言ひなすもの多し如何にせば此の汚名を雪ぎ得られんやとかこのつが如く又言ひ譯するが如くに語り出でしが某貴顯は造作もなく此丘尼となるに如かずと言はれしより是れ亦た呆れて返す

言葉なく顔を赤くして去りたりと奇言人を驚かすとは是等の事を謂ふならん

◎其印眞其書偽

明の文徵明と云へば誰知らぬ者なき能書にして明の三大家の第一人なるが或人徵明の贋作の書を携へ來りて印を乞ひけるに徵明快く之を印し與へたり人怪んで其故を問ふに徵明はさればなり書畫を賣るものは貧賤にして買ふ者は富貴なり我たとへ富人を誤りて損せしむるも寧ろ貧人を憫まんと欲するなりと答へけり

◎禪機

徳川三代將軍家光公品川東海寺へお成の時澤庵和尚に向ひ海近

くしてどう海寺とわ如何とありければ澤庵取あへず大軍を卒する身にてせう軍と云ふか如しと答へたりとぞ

◎狐色に

西區堀江下通り二丁目で可なり財産家の聞へある三谷邊某(二十)と云へるは或料理屋の娘にてお豊(二十)と云へる者と馴初め始の中は某料理屋へ通ひ居たりしが夫では心足らぬ處から到頭其親に掛合ひ公然自分の外妾とし難波鐵眼寺の近邊へ小意氣な家屋を出来い大蕩氣にのろけて毎夜其方許りへ寢泊して本宅へ寢る夜の稀なるより女房お咲(四十)は潜かに嫉ましく思へども荒立てチン／＼騒ぎをなすも智慧が無い話しなればと考へしが不圖一策を案じ出し或日夫に向ひて此程中より何たか氣分悪しくて俗

に云ふ勞咳病の下地の様ですから暫く出養生をさせて下さい併し氣樂に保養がしたいが外へ行つても費用が入るし又内も無くなれば寧ろその事に難波のお豊さんに本宅へ来て貰ふて留守中萬事を頼み私はお豊さんの妾宅で養生して如何ですと然も辛度そうに云ひ出したから宿六先生は豫て本妻の嫉妬戦をものゝ居た處なれば其意外の請求に驚きはしたものの何がさてお豊の艶色に感溺した際なれば二つ返事して其の通り實行したるにお豊は茲でこそ權を脱して正の位に進昇するは此時なりイテ勉強して旦突の機嫌を取らんものと勉強するので俄かに襷掛て煮炊萬端に大働となるが元來左程の美人と云ふでもなく所謂馬士にも衣裳とやらして只裝飾と厚塗て焜て化し居たるが生に

なつて先の容色の何處へやら失せて跡なら有様に宿六先生もナト嫌氣になりフト本妻の事を思出して如何なし居るか義理にも見舞ふてやらんと行て見ればこは如何に本妻お咲は此の妾宅へ來て以來日髪日風呂で磨光上げ南地風の薄化粧で見違へる計と美人となり居るより爰に始めて目が覺めお豊はお拂箱となり本妻お咲を目出度歸宅させしはつい兩三日前の事の由なるかの新造の焼餅は近來の上出來一手に取るな矢張野に置け蓮華草かね

◎ 諷諫

下谷區三筋町邊に住む東城某(六)といふは悴幾雄(八十)と二人暮しで千葉生れのお龜(十九)といふ下女を置き公債證書と貸金で何不足なくその日を送ッて居るので先是迄は新聞種になる程の事

もないが儘にならぬは浮世の習で親爺は最人間の相場より十年も生き延びた年として悴の前にも憚からず下女のお龜にカン／＼ノ一を極め込み到底手に入れてから今日は寄席明日は芝居と毎日浮世筋に悴幾雄は心配してそれとはなしに世間噺に事よせ意見をしても薬罐の熱度は中々強く更に用ひる様子がない故幾雄は一策を案じ出し去る卅日親爺が例の通りお龜を連れ外出した跡に竊に附けて行くと全区小鳥町の或る温泉へひき込んだので自分は取返し親爺の金五拾圓を取出し湯島天神へ車を飛ばせ同所の梅鉢猫小さん小春外一名を連れ前に親爺のひき込んだ小鳥町の温泉兼料理屋に行き隣り坐敷に陣取て床も抜けるばかりのスツチャン騒ぎに親爺は何な全盛客かど便所へ行く振りで

襖の間より見るとコハそも如何に悴の幾雄で有ツたので吃驚仰天お龜の手を引きコソ／＼歸宅した所全夜十時過悴も大酩酊で歸宅したか親爺は持ち出された金の調べも出来ず昨今ボンヤリして少し後悔の様子で居るとは悴さん大出来でした

◎馬イ

モ一時刻ですからなんなら御膳をどは早く歸れと云はぬ計りの挨拶、餘り心持の善くない者ですが態々遠方から來訪したお客に御膳でさ差上る筈ですが何もお肴が無くつてと切て出すは一倍手厳しい、そこで客が其家の庭を見るに澤山鶏が蓄つてあるからあれは一羽殺めれば……と思ひましたがまさかそうも云へませんから「ナニお肴がなくなれば私が乗りて參つた馬を屠りませ

ふ「イヤそれではお歸りにお歩行なされるので御迷惑でせよ」左様サ、鷄を一羽拜借して騎つて歸りませよ

◎自起開籠……

萬治寛文の頃鷄を蓄ふことの流行しけるが時の老中阿部豊後守忠秋も亦之を好みて數十羽を蓄ひ置公務の餘暇に愛せられけり或る諸侯之を聞ひて數十金を擲つて名ある鷄を購ひ豊後守出入の醫者を以て之を贈られたるに豊後守は之を觀て暫し呻吟してありしが頓て近習を呼び寄せ豫て蓄ひ置きける鷄數十羽を籠を開ひて放たしめたり使に來りし醫者は恐る恐るに斯様に放ち給ふても蓄慣らし給ひたる故歸り參るにやと伺へば忠秋は打笑みて否、人の上に立つ者嗜好する所あれを阿諛諂佞之より入る故

を以て我初めより無用の物を好まざりしが近頃不圖鷄を弄ぶに早此鷄を贈らる、こと驚くに堪へたりよりて爾今鷄は固より何物をも愛玩することなければ早々持歸りて此旨を傳へられどよわりければ彼の醫者は時ならず背に汗して逃ぐるが如くに立歸り此言を傳へしに其諸侯も深く恥入られしとなん

◎察智

板倉周防守京都諸司代たりしとき或日諸方を巡見するに路傍に居たりし一人の少兒周防守を指しアレ板倉が通ると云ふにぞ周防守眉を蹙め我苟も將軍家の台命を奉じて京都の諸司代たり誰か我を敬はざるのあらんや然るに此童子我を板倉と呼捨てにするこそ其家人等も常々云ふ所を耳にする故なるべし察するに

此童子の家人何か訴訟なぞに無理ありて我を怨むることあらんと早速に呼出して尋問するに果して其察しに違はず人は爲めに非分の訴訟に及ばれ難儀せる子細明かなりしかば頓て理否明白の處分をせられしと云ふ

◎水道の水

東京ッ子と葛西の兄いと喧嘩して「べら棒め見指いあがったかさやツと生れて水道の水で産湯を使つた兄いさんぐ」「ハ、已等ア毎日水道の水で糞擔桶を洗つて居るわい

◎醉生同感

鴻臚卿孔羣甚た酒を好む人之を諫めて若彼の覆甌布（酒瓶を蓋ふ布）を見ずや月日を経るに従ひ酒の氣にて糜爛するなり君の

身體も將に斯の如くならんと云ふに孔羣は否左にわらず彼の糟漬の肉を見給へ酒の氣にて久しきに堪るにわらずやと答へしと

◎不服故婦服

平野金華は陸奥の人なり守山の城主お仕ふ器宇曠達一世を侮弄す城主曾て令は布いて曰く五節句には必ず新衣を着けて伺候すべしと金華其妻の衣を着紅裙を蹴へして出づ重役之れを尤めて新衣を着するは君を敬するにあん然るに足下女服を着くるは何事ぞやと云ふに金華從容として拙者固より薄祿なれば家貧しく新衣を調へ難しされど君命は奉せざるべからず己むことを得ず斯の如しと答へけるが事城主に聞へ即日加増の沙汰ありしとぞ

◎悲と狼

岡山縣兒島郡八濱以下八箇村の人民は彼の兒島灣開墾を非とし
 て堅く相盟約し縣廳へ上願に及びしが先頃の事なりとか八濱
 村なる非開墾事務所へ標札は穩かならざれば改むべき旨向井
 警察分署よりの命ありしにぞ非の一字を代へて悲開墾事務所
 更のしに問墾を悲むと云ふも尙ほ未だ穩かならず治安に妨害あ
 りとて此程遂に右標札を撤去せしめたりと云ふ夫れとこれとは
 事變れど阿波徳島の有志者二三は近來政治上に慨する所ありて
 浪人組と云ふを組織し弘く同志を求めんものと新聞紙に廣告せ
 しどころ突然同地警察署より召喚せられ浪人の二字穩かならず
 して治安妨害の虞あるに付之を改むべしとの説諭に畏り早速
 浪人組と改稱せりとなん未だ其後の報には接せざれど非を悲と

改めても尙標札撤去の命ありとさへ云ふなるに改めぬ前よりも
 却て一層恐氣立ち今にも人を啗ひ裂くべう聞ゆる浪人組の一連
 は果して如何なる嚴達に觸れん事にや

◎唇寒し

平方松州は畫の名家なり幼少の時琴翁に就て學ぶ或日例の如く
 早朝稽古に行くに途中にて知る人の君は何の稽古に行き玉ふや
 と問ふに松州字の稽古に行くなりと答ふ問ふ者怒りて人を欺く
 も事にこそよれ君は畫の稽古に行くにわらずやと語るに松州夫
 れ程慥かに知りながら知らず顔して問ひ玉ふ足下こそ人を欺く
 なりと答へしと

◎大黒の頭巾

大黒天の何時でも頭巾を頂いて居ますから惣髪か、鬚か散髪か
いが栗かは誰も知ませんその大黒天が頭巾を脱した鬮を描けど
難題を出した話は頓智協會雑誌にも見ましたか或畫工は大黒天
が頭巾を手に持て居る鬮を望れて直ちに頭巾を持た手で暖簾を
掲げ半顔を出た處を描いたとはこれも目新しき意匠と云ふべし

◎吸付煙草

昔し朝鮮人來聘の時煙草益煙草を供す三使煙管を執とて何以ニ
煙火二薰ニ吾錦繡之腸一と口ずさるるに應接役新井筑後守(白石
先生)聲に應じて試以ニ煙火二爛ニ吾金鐵之腸一と答ふ一座嘆服す

◎小杯

傾斗醉生の兄弟分の様な人が或る宴會に招かれて行きしが其杯

の極めて小さきを見てチロく涙を落したり主人怪みて其故を
問ふ其人尙もシヤシリ泣をしながらさればなり吾父世に在せし
日何の疾もなかり玄に或る時友人に招かれて是と同じ様な小杯
を出れたるを酒を飲とたんに杯を呑み下しとらうく死に致しま
したか今此杯の小さきを見て父のことを思ひ出ましたと云ひけ
れば主人悟りて大杯を出て曰く快く一飲して其憂愁を散じ給へ

◎鉄食ふ虫もずきく

昔し中山大納言關東下向の際關東方にては何がな大納言の荒膳
を取ひしがんものど考へ登城の時玄關より御廊下に至るまで夥
しく刀劍類の板身を飾り立置けるに中山殿之を見てこは何故ぞ
と尋ねられければ御奏者某何氣な兒体にて今日は虫干を致すな

りと答へたり中山殿はカテ〜と笑ひ流石は關東程ありて鐵を
 食ひ虫が有ると見ゆると嘲けられたりとは天晴頓智の一言なる
 が頃日普西亞ハーケンの鐵道線路にて鐵軌を嗜みて之を常食と
 する一種の昆虫あるを發見したり長さは凡六分三厘、巾は五厘
 二毛位にして体に二個の小さな肉核を具へ其中には金屬を軟柔
 ならしむるの奇効ある一種の液を含めり虫が鐵を食はんとする
 ときは即ち此液を吐出して鐵に注ぎ掛くるなりと云ふ此虫をし
 て幕府の昔しに出でしめ山中殿に見せたらんには頓智の一言も
 其効を失はん頓智も亦時代によりて變遷ありと云ふべし

頓智奇談終

明治廿四年八月十日印刷
 明治廿四年八月十日出版

東京々橋區中橋和泉町四番地

發行者兼 印刷者 西村 魚二郎

名古屋市本町通六丁目

發賣所 東雲堂 本店

東京々橋區中橋和泉町四番地

發賣所 東雲堂



大喝采を博したる珍書口品切の處第四版賣出せり

笑天

風流三味

全一冊●紙數三百ページ

おも志ろし

大安賣八錢五厘郵税二錢

喉地

洒落場道

著作者

三遊亭圓朝。談洲樓燕枝。任天居士。天囚居士。十返舎一九。式亭三馬。醉多道士。花の家あらし。曾呂利新左衛門。近松門左衛門。左文翁。南柯中人。嵯峨屋おひろ。柳亭種彦。爲永春水

種目

一口ばなし。三題ばなし。滑稽論說。秘事まつ毛。口上茶番。落ばなし。棒づくし。地口。狂詩。偏らす口。女郎買客の心得。端唄。同替歌。都々一。大津繪。流行歌。頓智。珍事奇聞。閨怨。滑稽演舌。面白話。情話。滑稽語園。典故釋義。俳借。短句。狂句。もつとも。狂歌。ふみ其外いろく

